先達に聞く

（公社）日本造園学会関西支部・（一社）ランドスケープコンサルタンツ協会関西支部

設立 50 周年記念

荒木芳邦氏のアトリエ見学と座談会
吉村元男氏の都市は野生でよみがえる講演会

平成 27 年 3 月

（仮称）設立 50 周年記念事業実行委員会

ご挨拶

日本造園学会関西支部は、2016 年に設立 50 周年を迎える。これを契機として、関西地域でのランドスケープ領域の歴史を振り返り、そこから未来に受け継ぐべき技や知恵を発掘・共有化し、次世代に伝えることを目的とした記念事業を展開しつつある。そのひとつが、ランドスケープ領域の発展の節目といえる関西で開催された博覧会に焦点をあてた講演会の実施である。この報告書は、1970 年の千里万博に関連して実施した**「先達に聞く：荒木邦芳と吉村元男の世界」**と題する講演会の記録である。以下にその要点を紹介したい。

第１部「荒木邦芳の作品からみえるもの」は、荒木邦芳氏のアトリエ見学とその薫陶を受けた人々の座談会である。荒木氏が活躍された時期は、伝統的な造園技術に科学的なアプローチが加わった時期に当たり、座談会を通じて作品制作の中にその一面を知ることができた。具体的には、荒木氏は人間トランシットいわれた空間認識力をお持ちで、そういうことがランドスケープの造形化に活かされていたこと、常に新しい植物素材や各種素材に積極的にチャレンジされていたこと、独自の人間行動の観察から空間デザインを検討していたことなどである。さらに、荒木氏の作品の特徴として、「見せ場を明確にする技法の駆使」「遊び心のある空間技法」「視点場をつくる」ことなどがあげられた。以上のように、荒木氏は常にその場の自然特性を深く読み解き、様々な構成素材を組み合わせるデザインに心を砕き、どうしたら美しくなるのか、ということを絶えず考えておられたようである。このような良質な空間を生み出す姿勢信念は、まさにネバーギブアップであったと門人は回想している。このような荒木氏の造園家としての様々な技術やその取り組み姿勢は、ランドスケープを生業とする者にとって極めて根源的なものであり、あらためて学ぶべきことが多いと思われる。

第２部「都市は野生でよみがえる」は、吉村氏の講演会である。吉村氏と大阪万博との本格的な係わりは、万博の跡地利用計画である「緑に包まれた文化公園」の基本設計からである。ここで興味深い話として、「緑に包まれた文化公園」になった経緯として、文化人類学者である梅棹忠夫氏の「造園は過疎である」という考えも披露された。これは、周りの過密な建築群に対比した表現であり、建築をつくらせない場をつくることを意図したものであり、特定の機能を云々する以前にともかく無なのであるとのことで、大変衝撃を受けた。その後、吉村氏が提唱されていく「都市は野生でよみがえる」を具現化することにつながった理念といえるのではないだろうか。さらに、跡地利用計画では、高橋先生が提唱されていた森（密生林・疎生林・散開林）を基礎としつつ、水系、動線なども複雑に組み合わせながら多様な生態系を確保し、自然回遊式風景庭園（公園）づくりが目指された。そして、再生後 30 年の密生林にタカが営巣するなど、都市に囲まれた公園の自然再生の可能性を証明された。以上のように、ビオトープという概念もほとんど認識されていない時代において、生物多様性というキーワードに果敢に取り組まれた吉村氏の足跡は、極めて先駆的であり敬服に値するといえる。

以上のように本報告書には有益な示唆が満載であり、特にランドスケープに係わる若手・中堅の方々の一助になれば幸いである。最後に、本講演会の企画運営にご尽力を頂いた関係各位に心より感謝申し上げます。

平成 27 年 3 月

平成 26 年度日本造園学会関西支部

支部長　上甫木 昭春

目的

日本造園学会関西支部、並びにランドスケープコンサルタンツ協会は 2016 年に設立 50 周年を迎える。そこで、これまでの歴史を振り返り、影響を与えた造園家、節目の博覧会、都市緑化フェアなどに焦点を絞り、未来に受け継ぐべき技を温故知新の視点から、芸術・技術・学術の視点より検証し、その知見を次代の造園を担う方々に伝えることを目的として、記念事業を開催する。

趣旨

造園は美学である。研究を切り開くことと共に、独創的な技で現実の場をつくりだすことが中心の領域であるが、近年は公共事業の縮小と共に、作品を生みだす機会も減りつつある。大規模造成には携わった機会のない若い世代の会員も多いことであろう。

しかし、関西のランドスケープデザイン界は、かつていくつもの大きなプロジェクトを契機として飛躍を遂げてきた。1960 年からの千里ニュータウン、1970 年の千里万博、1990 年に鶴見緑地で開催された花博、2000 年に淡路島で開催された淡路花博の会場計画や花卉装飾計画等があげられる。とりわけ、1970 年の千里万博ではその会場計画だけではなく、新しい日本庭園の設計や博覧会をみすえた公園計画がその後のランドスケープデザインにも大きな影響を与えてきた。

これらのプロジェクトを牽引した造園界の先達として、荒木芳邦氏と吉村元男氏があげられる。これらの作家から、あるいは薫陶を受けた子弟から当時の様子を伺うことは、現代のランドスケープ界におけるさまざまな課題を解決する糸口を見出すことにもつながる。

事業をつくりだすことも造園の技である。先達の話から作品創造の技と共にその機会をいかにつくりだすか等を伺い、これからのランドスケープデザインの展望について参加者で議論を深めたい。

2016 年に日本造園学会関西支部は設立 50 周年を迎える。日本造園学会関西支部およびランドスケープコンサルタンツ協会関西支部の記念共同事業として、このような語りを記録し、刊行するならば、次の世代への財産となろう。

平成 25 年度日本造園学会関西支部
支部長　　若生 謙二

目次

ご挨拶
目的
趣旨
第Ⅰ部　荒木芳邦氏のアトリエ見学と座談会
第Ⅱ部　吉村元男氏の都市は野生でよみがえる講演会

第Ⅰ部　荒木芳邦氏のアトリエ見学と座談会

座談会 「荒木芳邦の作品とデザイン理念」

万博日本庭園から現代まで―素材にこだわったデザインと作品

日時:平成 26 年 6 月 14 日（土）
場所:(株)荒木造園設計(大阪府池田市鉢塚)
進行：上甫木昭春
日本造園学会関西支部長・大阪府立大学院教授
座談者：柳原寿夫
(株)スタジオ　アーバン　スペース　アート　代表取締役
宮前保子　(社)日本造園学会関西支部　元支部長
武田純　　ウッズプランニング　代表

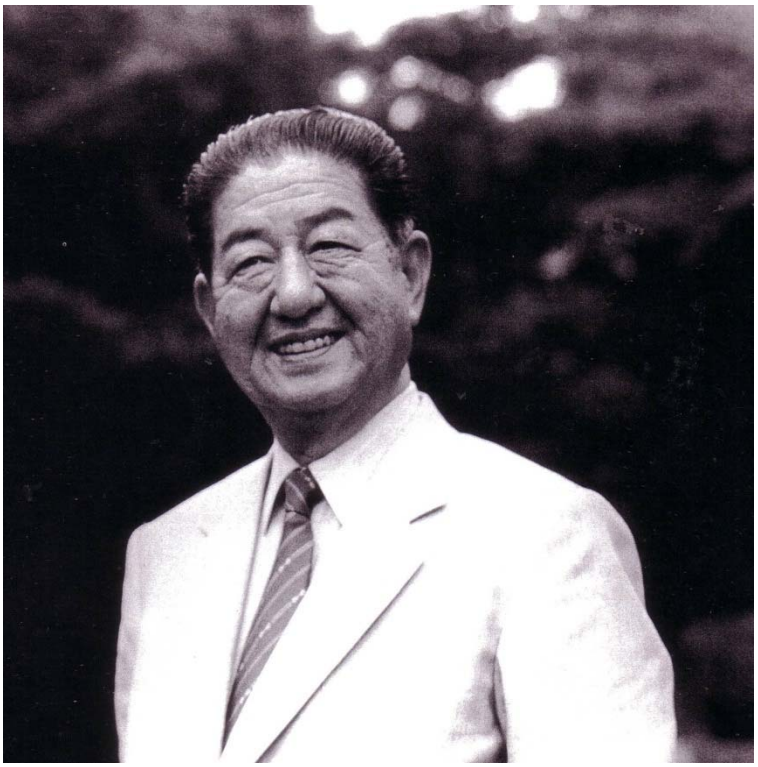
上甫木

大阪府立大学の上甫木です。よろしくお願いします。日本造園学会の関西支部は再来年で50周年、本部は来年90周年になります。関西支部ではこれまで先達が蓄積したことをじっくりと振り返って、将来に繋げ、継承していこうと思っています。

会場の様子

今日いらっしゃっている先生方にも色々とお話を伺って行こうと思います。今年は、万博であるとか花博であるとか、そういうものにきっちりと関わってこられた方々にお話を聞く中で、後輩たちが獲得することであるとか、教育をしていかないといけないものを拾い上げ、議論していきたいと思います。第Ⅰ部は荒木先生の足跡をたどりながら、造園の空間の理念であるとか、技であるとかを勉強します。第Ⅱ部は、吉村先生のお話を聞きながら議論をします。

第Ⅰ部は、荒木先生のアトリエをご提供頂き、この場をお借りしまして御礼申し上げます。宮前先生には、荒木先生の作品から見えるものとしまして、資料を作ってもらっています。その資料を見ながら進めたいと思います。基本的にはお話しを聞いて、議論をしたいなと思うのですが、多分話の途中で、いろいろ意見を交換しながら進めた方がいいんじゃないかと思いますので、宮前さんや私の方からいろいろと話題を振ります。そのような形で進めていきたいと思いますので、会場の皆様方の積極的なご参加を願います。

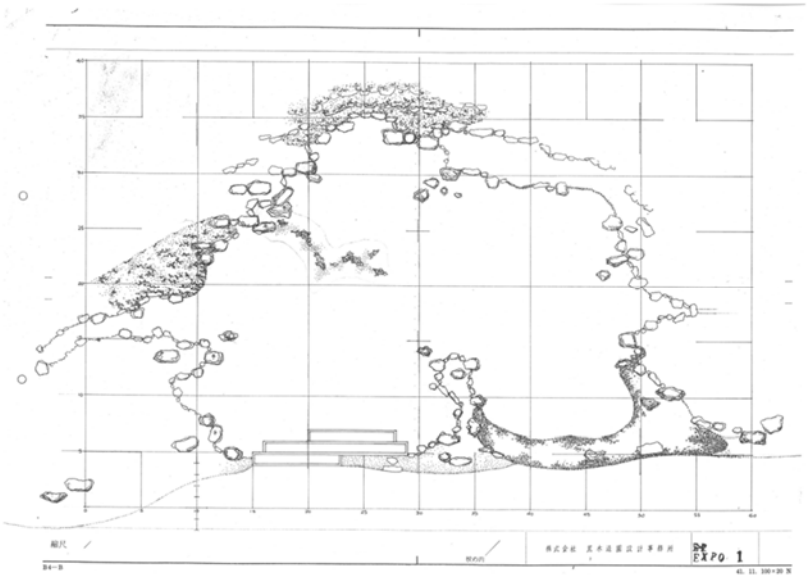


ありし日の荒木芳邦先生

宮前

宮前です。よろしくお願いします。荒木造園設計事務所には花博が開催された 90 年まで、7 年半ほど設計部に勤めておりました。こちらにいらっしゃいます柳原さんや、教えを頂いた各先輩方が沢山いらっしゃる中で、若輩者ではありますが、荒木芳邦さんから聞いたことを私なりに解釈して、説明させていただきます。特に若い方々には、荒木さんから継承すべきものが沢山あるのではないかと思いますので、資料に添ってお話をさせていただきます。

まずは時代背景ですが、荒木芳邦さんは 1891 年、池田市でお生まれになりました。1895 年に造園学会が設立されました。つまり造園学会が設立された時と、時を同じくして生まれた方と、言えるかと思います。それがどういうことかと言いますと、伝統的な造園技術に科学的なアプローチが加わった、ちょうどこういう時代に活躍されたということです。ランドスケープデザインの世界でも戦後に入り、1956 年に都市公園法が施行され、1964 年に東京オリンピックが開催されました。今、2020 年のオリンピックで東京が盛り上がっていますが、1964 年にオリンピックが東京で開催され、新幹線が開通した頃、日本経済は右肩上がりの時代だったのです。そのころに荒木さんが活躍されました。戦後の復興期を経て 1970 年に万博が開催されて日本庭園が政府出展として建設されました。このスライドは荒木さんが検討された万博日本庭園の正面の池と石組みの基本構想をとりまとめた図面です。柳原さん、荒木さんのお考えはいかがでしたか?



万博庭園の計画図

柳原

おぼろげですが、石組みのちょうど真ん中の中間の一列目左側の方が北側ですが、流れが北側から始まり、途中で本流と合流してそこへ流れるような計画ではなかったでしょうか?

右側、柳原氏・左側、宮前氏

宮前

1970 年の万博日本庭園というのは公共事業としてはかなり大規模な事業だったのですが、大阪市・大阪府の公園関係者、中根庭園の中根金作さん、荒木芳邦さんなど関西のランドスケープアーキテクトが携わった大規模プロジェクトでした。関西では、ちょうど 1964 年から千里ニュータウンの建設が始まっていました。それから万博会場の計画がありました。そういう大規模なプロジェクトがはじまった時代でした。

ちょうどこの頃、国民所得が倍増し、児童公園や国営公園までパブリックな空間のランドスケープの設計やデザインが主流になったのです。さらに時代が下り、1990 年以降、経済は右肩下がりになってきました。1995 年に阪神淡路大震災が起こりました。実は関西でご活躍された井上卓之さん、中根金作さんは、1995 年に亡くなっています。荒木芳邦さんは 1997 年に亡くなっています。1990 年代は関西を代表する作家が三人も亡くなっています。このことはとても象徴的な気もします。

2000 年になって淡路花博が開催されました。さらに COP10 が愛知で開催され、生物多様性が話題になりました。新たな時代が幕開けしたのかなと思いますが、2008 年以降リーマンショックがあり、スローライフなどの考え方がランドスケープデザインに影響を及ぼしてきました。

この会場も実はコミュニティスペースだそうです。1 階を利用してカフェが造られましたが、ランドスケープデザインというのは視覚だけではなく、味覚も重要であるからカフェも併設されているのだと思います。あるいはこの場で新しいコミュニティも生まれる予感がします。実はこれからの時代はコミュニティを大事にする方向に向かうのではないかと思います。

こうした時代の流れのなかで、作家として荒木芳邦さんはどういう人であったかということをお話しします。一つ目は経験に基づく技術を展開されたことです。荒木芳邦さんが太平洋戦争に出征された際、塹壕を掘る作業に関わっておられたことからのエピソードですが、ある場所から向こう側まで塹壕を掘るにはその場所の高さがわからないと作業が進まないという経験から、ある場所と目的の場所の高さ関係を目で見て把握できたというお話を聞きました。そういうことを長らくしていたので人間トランシットと呼ばれておられたそうです。高さと方向が体感できる、そういうことがランドスケープで造形化されていたのだと思います。

経験にもとづく技術展開のエピソードの二つ目としては、センペルセコイアなどの新しいランドスケープを象徴するかのような植物素材を自分の庭の苗圃で育てられたことです。今は一般的に使われているメキシコマンネングサも苗圃で育てて、自ら設計した庭園に導入されていました。

エピソードの三つ目は土壌へのこだわりです。根系図鑑をよく見せられまして、「この木はこれ位の根が張る。これ位の深さだ。これを見て土壌改良しろ」、と言われました。

エピソードの最後は図面へのこだわりです。公園設計でしたら 500 分の 1 とか、2500 分の 1 が一般的な図面の縮尺ですが、1 分の 1 や 10 分の 1 で図面を書くことも指示されました。つまりディティールまでこだわってデザインを進められたのです。されにそれを現場で実現するときにもディティールを大切にされたのです。こうしたことが体得した技術展開という点で荒木さんの造園家としての特筆すべき点だと思います。

造園家としての特徴が事例研究とその応用です。国内外のお庭を沢山手掛けられましたが、海外の著書を、よくご覧になっていらっしゃいました。事例研究から、人の利用というものをよく観察されていまして、階段の踏み面と蹴上げの関係も人間行動の観察から検討されていました。柳原さん、その寸法はいかがでしたか?

柳原

踏み面が 400mm、蹴上げが 130mm と記憶しています。造園の一般的な書籍で言うところの寸法と、ちょっと違うのですが、歩きやすい階段を調べられたということで、楽に上がれる。それは外国に行かれた時に測ったら、楽な階段があって、その寸法を測って、日本の階段はきついということで、そういうものを基準にされていました。

宮前

このような人の利用を基準にして空間を作られたのも作家としての荒木芳邦かなと思います。

最後に、造園家としての荒木芳邦さんの特質は素材へのこだわりです。庭園に色々な素材を使うための研究もされましたが、そのひとつが丹波石の層積みです。丹波石の層積みは難しいのですが、これをかなり多用されました。

また、黒御影石を使うとか、噴火石と言って火山で出てきた石を滝に使うとか、木材も南洋材ですがバツ材をかなり使っておられました。手すりに使用する鋼材もかなりこだわったデザインをされており、素材に関する研究と活動を多くされてきたことが荒木芳邦さんの作家としての特徴だと思います。

具体的には、作品をご覧になっていただきたいのですが、素材に関するこだわりのひとつは東京の新宿 NS ビルの屋上庭園です。コニファーとジュニファーを中心に植栽されているのですが、写真を見ていただければわかりますように、緑の濃さがいくつかあって、黄色い色が入っている。針葉樹であると比較的管理も簡単ですが、華やかさもあり、彩空間を作り出すことに成功しているのです。

新宿 NS ビルの植栽

柳原

新宿の NS ビルですけど、人工地盤です。それで当時コニファー類が流行った時代でもあるのです。葉っぱの色合いの変化、これを組み合わせてコニファーオンリーと言う感じで、この時代から地被類、グランドカバー、という言葉が出て来たのではないかなと思います。でも管理が今の状態ではダメです。日本のサツキとかヒラドとかありますけど、成長ですね。下に這うような形で管理しないとコニファーの良さが出ない。今は玉物の刈り込みみたいな感じ。後々管理していくにはどうやって管理したらいいのか、教える必要がありますね。

宮前

オーナーからのリクエストとかはありましたか？

柳原

なかったです。この建物は日建設計が設計したものですけど、屋上庭園とか人工地盤の緑化とかはこの頃から始まり、一発目の感じ。初期のビル緑化です。

宮前

続いて素材に関するこだわりとしての噴火石ですが、噴火石というのはひとつひとつはそんなに大きくないのですが、それを「おのころアイランド」で滝石組にしているものなのです。滝に噴火石が使われることで、水の落ち方がすごく細かくなり、表情が豊かになっています。

おのころアイランドの滝（噴火石使用）

柳原

荒木芳邦さんは水の落とし口をすごく気にされる方で、豪快さ、静けさ、局面から落とすなど様々な水の変化をデザインされていましたし、研究もされていました。この時は豪快さを演出するために噴火石を使われました。いろんな噴火石があるのですが、この石が良いということで選ばれました。「暴れさせたい」というのが口癖でした。全体的に暴れさせたい。水を一律に落とす装置も考えました。水が端っこから流れてくるのですが、端から向こうまで行ってずっと流れます。

柳原

これで高さ 10mくらいですね。おのころアイランドは。

宮前

次に素材に対するこだわりの事例である丹波石の層積みと黒御影ですけど、層積みの丹波石とアプローチの黒御影の組み合せの素材感と色彩がかなりうまくできています。これも個人の住宅なので、今はどのようになっていますか?

柳原

今はありません。でもここの家の外壁に丹波石を 2m積んで、長さ 20mほど積みました。その石を外してですね、持ち帰ってカフェの前で積み直しています。

層積の丹波石と黒御影石の組み合わせ

宮前

次は、シアトルのウォーターフォールガーデンです。かなり初期の作品です。空間を広く感じさせるために、大振りの御影石を層積みにしています。

柳原

これは高さ６m。迫力のある、見上げるようなところから始まります。シアトルのオールドタウンの街の中。当時、街の中でポケットパークが流行った時代ですね。その頃に造られたものですね。小規模なものですね。水の音が反響しています。

石の素材はシアトルで見つけ、六方石のようなものです。そのような情報は日系二世の造園家たちのところから。私たちも現地に行って探しました。

シアトル・ウオーターフォールガーデン

宮前

これは現地で探された石を使ったキューバの日本庭園ですが、これも噴火石です。

キューバの日本庭園

宮前

右側が荒木芳邦さんのスケッチですけれども、このイメージスケッチ通りのものが、出来ているのでしょうか? 現地の素材を使っているからこそ、キューバの市民にも愛され喜ばれて、絶えずいろんなイベントに使われているとお聞きしましたが、やはりその国の地域のものを使っていることで、海外の方にも喜ばれる日本庭園になるのでしょうか。

キューバ日本庭園スケッチ

柳原

これはキューバに荒木芳邦さんと、二人のスタッフを伴い行ったのですが、労働力は軍隊です。「明日は何々するよ」って言ったら、トラックに満載で 50 人位乗ってきて人海戦術です。指揮はこちらでしているのです、作業はあちらでやってもらって。

宮前

この規模で何日位かかったのですか?

柳原

2 ヶ月くらいです。

宮前

すごいスケール感ですね。

柳原

水脈と岩脈が地表に現れた景観を作り出したり、奥から水景があって流れ出て来ている景観を作り出したり。

近藤公夫先生

余談ですが、荒木さんは戦争中関東軍に所属されていました。工兵部隊におられて師団長命令で、向こうで庭を作ったと言っておられました。だからその時に、兵隊をかき集めて、こういうことをやっておられた経験があると思います。

宮前

先程もご紹介しました木材を、荒木さんはどんな時に使われていたのでしょうか。左側は、おのころアイランドの園路をつなぐ橋梁型のものですね。それから下の方は個人庭園ですけれども、セランガンバツ材とか南洋材は、今は手に入りにくいものですけど、かなり耐候性が高い素材で、このようなところにも素材に対する研究の成果があらわれています。この庭園は芦屋市内の庭園です。

柳原

上の板塀があるところの下はガレージです。

武田

木材に昔は切り込みを入れて、組み合わせて使うのが普通でしたが、屋外でこれをやると材木の中の水の通り道が止まってしまいます。それをしてはいけないと、アメリカかどこかで勉強されてきて、ずいぶん苦労されて試行錯誤されていました。この様にすると腐りにくいことがわかり、いろいろな作品を創り出しました。

右側より上甫木先生、武田氏、若生先生

宮前

造園家としての荒木芳邦さんの特筆についてお話しましたが、次に荒木芳邦さんの作品の特徴としては三つくらいあると思うのですが、そのことをお話します。その一つ目が見せ場を明確にするということです。ビスタを効かせる、落ちる水を使用して視線を集中させる、凹凸のあるデザインなどが試みられています。

二つ目の特徴は、結構お茶目な方だったので、遊び心のあるデザインを繰り広げるということです。例えば噴水でも時間とともに変化したり、歩くと水が吹き出たり、遊び心のあるデザインをされていました。ほかにもどんなチョウがやってくるか、ジーッと観察して、どの色の花に一番チョウが長く止まっているか見ながら、花壇植栽の色を赤がいいとか黄色がいいとか決めておられました。

背後に配慮されたベンチコーナー

三つ目は視点場を作るということです。視点場をつくる際には必ず高さや機能性とかも考えておられました。あるいは滝を見る場所を作るとか、屋内の床の高さとの関係なども配慮されていました。また、休息の場をつくる場合にも、人間は背後が壁じゃないとベンチに座らない、ということをずっと言っておられて、これも戦争に行った時に、後ろから襲われる経験を防ぐための工夫から発見されたことかと思います。

これがビスタを効かせる例ですけども、写真は古いものですが西宮の大谷美術館の庭園です。こういった庭園に技法が使われています。

大谷美術館

柳原

見通しが効くというか、前が塞がるというのは嫌いな感じ。絶えず前は開ける。両サイドは締める。ビスタ、ビスタとよく言われましたが、土地を見れば奥行き感がわかる。現場を見て判断し決定されていました。

宮前

これが先ほど見ました凹凸デザインです。これを見ていただければわかるとおり日本庭園ですけど、池のエッジのラインが微妙な曲線を描いているのです。これが遠近感、奥行き感を見せるのです。それから、これもエッジのところですが、縁石の上が丸いものを使って色を塗っています。縁石と植栽のあいだを繋ぐようにデザインしています。

池際のデザイン

武田

水辺もそうですが、すごくエッジが好きで、ディティールにもこだわられていました。

宮前

これは神戸市役所に隣接する東遊園で、先程も言ったビスタが効いている園路ですけども、ここに壺みたいな噴水があって、人が歩くと噴水が出る仕掛けになっています。これも池の底の方から噴水が出るようになっています。公園の施設でメンテナンスとかの問題がありますが、遊び心が生かされた結構楽しい公園だったなと思います。

人が歩くと吹き上がる噴水

池底から湧きあがる噴水

柳原

左側の丸いところ。下が駐車場になっています。タンクに水が貯まり、下に降りていきます。その筒が、高低差を利用して、水の重さで上げたり下げたり出来るようになっているのです。だから変化としては、水がいっぱい溜まっている眺めがある時間、そして、一気になくなって、周りのところから出てきて、下から出て来てまた満水になる。時間差 3 分おきに変化します。

わきあがる噴水、霧をつくる

近藤公夫先生

この霧の噴水ですけど、荒木さんから「見てくれ」と言われ、行きまして、霧が吹き出したある時点で、虹がかかるのです。これが見せ場だと言っておられました。

宮前

視点場を作る際にも高さを考慮して視点場を作られていました。例えばこの写真のように、隣接する建物から空間がどのように見えるのか、ということをいつも考えておられました。つまり一方向から見るだけではなく、視点場の変化を考えてデザインしていくことに配慮されていました。

高さの異なる視点場をデザインした事例（池袋サンシャイン２１・公園）

武田

樹木を並べるというのは、アメリカで身につけられたのだろうと思いますが。都市緑化のデザインの仕方でもあると思うのですが自然の模倣だけではなく、ある部分だけ桜をまっすぐ植えるとか、八の字型に植えるとか、そういう手法が見られました。特に市街地の都市緑化ではこういうデザインをされていました。

荒木芳邦さんは新しい樹種を探し出してくることにも熱心でした。着目した理由は目新しさにもありますが特有の樹木美があり、その反動で荒木さんの逆鱗に触れる樹種があり

ます。メタセコイアはダメでした。メタセコイアの樹形、枝は上に伸びるのです。ラクウショウの枝は水平に伸びます。その美しさを好まれていました。センペルも良い。特にラクウショウは落ち葉が落ちて下に積み重なった時の羽毛のようになるのも美しい。落葉してしばらくは掃かないでおいていました。

柳原

噛み砕いた説明になりますが、「落ちる羽の松と書く」ことでそれが好きだったみたいです。この建物が出来た時のアプローチにラクウショウの 6m 位のを植えました。

宮前

次に見せ場をつくりだしたこの庭園では、滝石組の前に座禅台がありまして、畳の間がイメージされています。海外の日本庭園では座敷の中から借景を見るという、日本の文化を提示する、そういうところまで、考えているデザインです。

近藤公夫先生

1970 年代の後半ですが。ハンブルク大学に僕の知っている先生がいましてね。「植物園の中の日本コーナーを何とかして欲しい」という話をいただいて、荒木さんをハンブルクの大学に紹介したということで、一緒に何度か行きました。この機会に「日本の禅とは」これまたドイツ人が好きですから。小さい滝を見てください、水の音を聞いてくださいと、来る人に案内したりしていました。そういうのも荒木さん好みの演出の一つでしょうね。

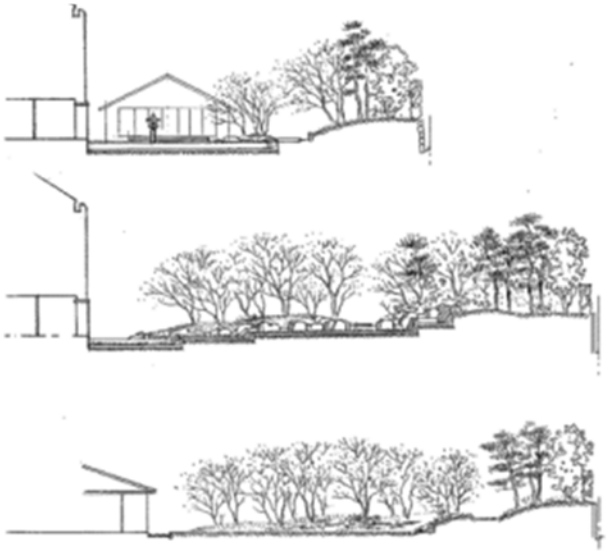
ハンブルク大学植物園日本庭園の畳の間をイメージした座禅台

宮前

もう一つの視点場をつくりだした事例ですが、ドイツ・ハンブルクの日本庭園がある中央公園、プランテンウンブローメンの日本庭園です。ここでも視点場が池に張り出す形をしています。このようにちゃんと庭を鑑賞する場を意識してつくられています。水辺に近いところでは、樹木が水辺に映えるように、池底の仕上げというようなところもちゃんと配慮されています。これは国際コンペで荒木造園設計事務所がグランプリを獲り、現場で施工指導もされた日本庭園です。

柳原氏のイメージスケッチ

プランテンウンブローメン日本庭園



大谷美術館庭園部の計画断面図

もう一つが西宮の大谷美術館です。屋外と庭園の間が一体となるように、かなり細かく敷き際の高さ関係を意識してデザインされています。大きな窓ガラス、それから高さの配慮、１０分の１とかそのレベルで考えて作品が出来上がっていると思います。それは、我々が作品をデザインする時でも微妙な高さの差というものは、作品を作る上で知っておかなければならないのかなと思います。

和室前の枯山水

最後はベンチコーナと呼ばれた視点場です(前掲 p16)。トレリスの後ろ側は壁があり、ベンチに座ったら前を見る、さらにその前に池がある。こういうベンチの向きは何を見て欲しいのか、が明確になっている、これが荒木作品の表現です。荒木さんの作品は、このような特徴があるのですが、最後は石樋の滝です。最近、荒木造園設計の皆さんが奈良市の住宅の中で作られた例です。

荒木芳邦さんの思いを、若い人達が中心になって脈々と受け継がれていく、ということがわかる作品で、そこがすごく大事だと思います。最後ですが、荒木芳邦さんはネバーギブアップの精神でデザインをされていました。どんな時でも諦めてはいけないということをモットーとされていました。

図面は、締め切り日の朝でも書き直す。気に入らないところがあれば何度でもやり直す。模型を作っても更にもっと考える。それから石組みの施工の管理でも何回も現場で変更する。最後まであきらめないで作品をつくりだすという精神です。

柳原

諦めというより常に、より良いものを、ずっと考えておられる人でした。昼間、寝ている時でも考え、風呂に入っている時でも考えている。事務所に帰った時でも、入った時に「違うな」と言って検討し直す。それでまた翌朝、もう一歩踏み込んで直す。常により良いものを求める。

これはですね我々からしてみれば、本当にそこまでする必要があるのかと思う位、見えないところまで一生懸命考えるということです。儲け関係なしに、いいものを追求するということで、造園をされる人は常にそうだと思いますけど、この辺でいいという自己判断ではなくて、決め手を考える。まとめるまでは何度変えても構わない。若い人には考えて欲しいなとは思いますけどね。

武田

新たな造園空間をつくる際、荒木芳邦さんは山野の風景、特に渓流を愛され、噴火石、コ二ファー、カバープランツなどの新たな素材の発見、遊び心を持つなど、常に良い空間を模索され、海外に出られても材料は現地調達を貫かれ、妥協されない姿勢を見せられました。

設計では原寸に近いスケール感で図面を描き模型を作られ、それを地面に置き、社屋の 3 階からご覧になり、収まりをチェックする。窓から見える蝶の飛来を観察され、どの花にとまるのか、その結果を植栽計画に活かす。

現場では、建物と庭の取り合いに細やかな配慮があり、距離・高低差の微妙な収まりをチェックされ一体感をつくるように塾慮されました。

荒木芳邦さんは口下手で、テーマとかコンセプトは頭にあるのですが、おっしゃって下さらない。でも、それを形にするのがお上手でした。それが形にならないから、私たちに違う、違うとおっしゃるのです。

今、こう言うのも失礼ですけど、コンセプトが形になっていないモノが多いのです。我々が荒木芳邦さんに教えてもらったものは現場で形にするということなので、その能力は高くなったかなと思います。

近藤公夫先生

クライアントのために気がすまんというよりも、自分本人がデザイナーとして気がすまんというのもありますよね。そのデザイナーというものは図面よりも出来上がったものが大事だから、図面描いたけれども、これがホンマに出来上がったら、どのようになるのかな、ということでもう一度考え直す。図面の見栄えが悪くても、これじゃなかったら、いい庭にはならない、ということがあったのではないでしょうか。

私の荒木さんとのお付き合いは昭和 35 年の宝ビールから始まるのですが、あの時に荒木さんはあれだけの庭を作るという経験をされて、それから随分、火山岩の石を使われました。伊豆から取ってこられまして、それは、一つは比重が軽いから非常に扱いやすいというのもあったのですが、使っているうちに石の良さを見つけたからこそ、そのあとの滝なんかにも使われるようになったのだろうなと思います。

それからハンブルクの日本庭園の話がありましたけれども、あれは大学の植物園でしてね。随分植物を選ぶことが出来たのです。そこから、地被の活用について目覚めたのではないかと思います。日本の地被には適わないけどこんな使い方もあるということが、1970 年代の荒木さんの庭に反映されてきたのではないかと思います。

宮前

荒木芳邦さんは自然、風だとか土壌だとか、それと、樹木と樹木を組み合わせるデザインはどうしたらいいのか、どうしたら美しくなるのか、ということを絶えず考えておられました。列植しても美しい木と美しくない木がありますし、そういう組み合わせにもこだわりがありました。ランドスケープデザインの原点に帰って私たちも考えなければならない点です。出来た作品が美しいこと、人々に受け入れられるということが大事です。

ただ、今の時代の若い方々の感覚と違うところがあります。荒木さんの作品は鑑賞することがメインテーマであったと思います。これからは、ランドスケープ空間で色々な活動が重要になり、デザインにも使うという考え方を取り入れていく方向にあると思います。

これからのランドスケープデザインで考えていかねばならないポイントだと思います。

原田
　今日寄せていただいた中で、建物のコントラストや建物と立体的にやることをご苦労されているということを感じました。

柳原
　建物と庭との接点。中間領域というか。つなぎは地面、昔の家などをよくご覧になっておられました。収まりとしてね。最近は建物と庭とのつながりが悪いと。なんでこのようにするのか。建物は収まりの悪いハウスメーカ。昔の建物を見ろ。よくおっしゃられたのは。「あーや、こーや」と、言っても教えてくれないので「どこどこのなになに」を見てこい。石積み、壁や庭を見て来いと。

原田
　仕事の中で、建物外、注文つけたりとかそういうのはありましたか。

柳原
　それは中間の領域を建物の方に要求して、建物中に入れこんでいくとか、そういったことはお互いに打ち合わせしてやっています。

原田
　今日見せていただいたモノの中で具体的にありますか。

柳原
　大阪リーガロイヤルホテルですね。これの右側の滝の裏は、水面より一階から地下一階のフロアまで下がっており、車の通路になっています。右側だけ、水面を下げてもらったということです。それはこちらから注文をつけて、滝を滝壺のように落とし込む。そういうことを建築に要求してやります。

武田
　私が聞いたのは吉田五十八先生に、奥まで人を誘導しないといけないからから、それを考えろと、言われました。

柳原
　常に見え方というものを大事にしておられました。座った時、立った時、絶えず図面でここに座ったら何が見えるのか。どういう方法で見たら何が見えたのか、絶えず情景のイ

メージを作りながらやっていました。高さにも立って見た時、座ってみた時があるからね。1ミリでもこだわるのはそういう具合です。水面の高さとか。

武田

水面は上げているのですか?

柳原

上げる方が好きですね。目に近づけた方が、水面としても迫力がある。沈んでいるよりもね。

近藤公夫先生

アウグスブルグ市(ドイツ)の日本庭園はですね。今写っているスライドの端っこが上流から流れている滝の落口になりましてね。その凹んでいるところの横が動物園です。そちらの方の水がこちらの庭園に流れてくるように計画されています。見せ場としましては木の柱になっているところ、橋を渡ったところが、四阿になっていまして、そこから見るところ。それぞれ、どのような高さで見せるかというのを検討されていましたね。

一緒に考えたのですが、あとで井上卓之さんと行くことがあったのです。その時井上さんが「この滝の石組が、荒木さんの扱いであれば代表する滝や」と言っておられました。どうぞドイツまで見に行ってください。現場でそういうものを探し出すというのが役立ってきたのですかね。と言っても、分かることではないのですが。

アウグスブルク市の日本庭園

武田

もう一つ荒木芳邦さんにとってラッキーだったことは、柳原さんがカメラアイ（眼）を持っていたことです。柳原さんは一度見たものは事務所に戻った後でも絵にできるのです。荒木さんの感覚を絵にするのが柳原さんだったのです。

どこに何がある、どこにどんな木があるという視点場に至るプロセスはどう思われているのか、また次の視点場へのシークエンスはどうされているのか、ということをスケッチや平面図に起こしてしまう能力があり、荒木芳邦の世界を表現して我々はもちろん、荒木芳邦さん自身も確認することができたことだと思います。

荒木芳邦氏の世界を表現する柳原氏のスケッチ(大谷美術館小会議室前)

柳原

例えば点景物があるとします。これなんかで言うと、これまっすぐ歩く人達、こういう具合に道があったら向こうに見たいものが見えないのです。迂回することによって、この道を歩く人、全ての人が目的物に見える。ストーンヘンジなんかは人の頭は見えないようになっていて、グルーっと回ってズーッと見ながら歩いて行ける。見るものを人間が邪魔にならないように作っていく。

ドイツの庭園も、まるくしてあるから、人が邪魔にならずに鑑賞できる。アメリカやドイツの動物園などは行っても動物だけがうまく見えるような仕組みにしている。柵やフェンスは下の方につけて、柵が動物の妨げにならないようにしている。直接フェンスは見え

なくて、動物だけが見える。動物園のそういった技法は昔からある。
　三本、線をひいてくれたら、全部図面が書ける。あくまで、どういう線で。まあ、現場を一緒に見に行って、例えば設計をやりはじめた時に、こういう風にしよう、この辺はこのように、そういうことで大体、荒木芳邦さんの考え、設計の構想までわかり、描くことが出来ましたね。

上甫木
　作品というのは、常にパノラマというか、風景を作っているのですね。視点場から読み取る、キーになる風景もあるのですが。それもあるし、色んな自然の情景というのは、よく見てもらわないといけない。どのような見え方なのか、流れでいえば、ああいう、自然をあのようにどっかに造りたい。そのようなことが大事。それと素材をどこにどのように使っているのか。まあ、山のところとか、それで樹形なりを意識して、あの雰囲気をどっかで造らなくてはいけない。それを探し回っている。

武田
　荒木造園には植物の組み合わせ方があって、あのころは稲妻型と言いまして、人が歩いていく方向に対して、どういう角度に向いたら人を引っ張れるのか。生き生きとした景観に見えるのか。という方法を一生懸命編み出そうとしていましたし、みんなで考えて、荒木芳邦さんの考えを形にするのに一生懸命になっていました。すると、自然と稲妻型になってしまいました。
　そいう方法でしたね。口では言えないですけど。色物を使った植栽ではなくて、ただ単に色を使うのではなくて、その植物がどのあたりにあったら、歩いている方向に対して人を誘導できるのか、きれいに見えるのか、という事を考えておられました。ああいうのも、まさに現場でいちいちのスケールで試されていました。

柳原
　現場ですね。図面では、そんな風にしてもそれを見てやるのは難しい。図面はね、大体だから現場で変更するとか、変わるのは当たり前でした。「今日は、このように言っていただいて、最後に出来たものは違う。」
　現物のように、全く同じものになるのはありえないのです。何度もサイズとか見て。現場で判断。そのような感じ。そんなの造園で分かるはずがない。同じものはないでしょ。主に現場でやるのです。

上甫木
　パネリストの皆様ありがとうございました。それでは会場から質問などはありませんか。

会場より

今、荒木先生の技術を継承することを考えているのですが、先生はどういう風に考えておられましたか。

熱心に聞き入る出席者

柳原

作ったときに将来、ある程度に見える景観、というのをある程度大事にして。あと、将来 10 年後というのは当然、見据えて設計もしておられました。

会場より

どんな公園が出来ているのか。どんな植栽をしているのか、常に手入れをしているのか。今、すごく良い景観で。秋にはすごく紅葉して、遠くからその景観を見に来られる人もいる。植物に対して、そこに住んでいらっしゃる方の考えがある。

文句言う人もいる。車が来すぎるとか。人がうろうろするのが嫌だとか、先入観というのは色々ある。借景にしておられる、それが今も素晴らしい景観になっている。

柳原

荒木芳邦さんが選別する樹木というのは伸ばし放題にしたら駄目な木もあります。ある程度、管理をしないと駄目ですが。管理して、出来たときが一番大事です。それが維持できるような樹種を選んで、だから管理がすごく重要なのです。

会場より

海外に造られた庭園の維持管理は、今も行われているのですか?

鍛冶

荒木造園設計の者ですが、海外に造った芳邦さんの作品を管理しているか、というご質問ですが、私どもが現在海外に行って管理をしているということはありません。 今は造ることに忙しくて、手が足りなくなってくる。

原田

柳原さん、ちょっとよろしいですか。今のお話ずっと聞かせて頂いて、せっかく造ったところで、後のことまで考えていない。とにかく造るときはそこに力が入ります。必ずそうなるのですが。日本の技術を集めてやりましょう。済んでしまったら、ほったらかし。そういう世界になって来てしまっているのです。予算が無駄や、何やの話ではなく、やっぱり必要な無駄もあると思う。せっかくの日本の文化を維持していかなければならない。

大使館員やワインが無駄とかじゃなくて。今日「おもてなし」という言葉が流行っていますが。まさに今おっしゃったように日本の文化というものに求められている姿じゃないのかなと思う。余分なことですけど、ここの市長さんも緑に造詣が深い方ですので。なんか絶好の素材やと思います。あそこに行ったら、荒木さんが住んではった緑のすごい、ええものがあるなと、言われるような公園を作ったらどうですか、市長、柳原さんの力をお借りして。

柳原

日本人が手入れするより、外国人の方が植物を大事にされている。植物の扱い方がたぶん、日本人の植物関係者よりは一生懸命研究されて。植物の扱い方が上手だ。そこは荒木芳邦さんもちゃんとご存知で。土壌の改良、やっぱり踏んで、足が「ずーっ」と地面に沈む、そういう土壌にしなければいけない。踏んでわかったのです。

土壌に対して、あれだけ一生懸命改良して、木を育てる。今でも管理されていると思います。日本の公園できれいに維持されている公園、どこにあるのですかね（笑)、大阪でもきれいにしている、という公の空間、公園、あんまりないのです。壊れかけたベンチ、木にもたれた支柱、そのようなものばかりです。木も変なところで切ったり、電線のところでぶつ切りにしたり、そういうことを平気でやっている。ちゃんとした管理はないですよ。外国人はみんな植物に対して丁寧に接します。

武田

かつては、けっこう詳しい人が多かったせいか、熱意が伝わって、熱心に維持管理して頂きました。ドイツの場合はですね、植物園は公園や大学の一部ですから植物園長がいて管理されています。庭に関してのレポートも充実していました。だから井上卓之さんと一

緒にやったベルギーの、こないだ開園 20 周年を迎えた庭園も、ちゃんとした本も出ていました。作ったときより良くなっていました。だから、日本から出たものはそんなに心配しなくてもいいのではないかと思います。

中橋

荒木先生がお亡くなりになる直前ですが、先生の技術の継承が必要、ということでランドスケープコンサルタンツ協会関西支部に研修会をつくりまして、勝尾寺、大谷美術館と回りました。先生に「次は久安寺ですね」とお伝えした直後に屋久島で急逝されました。あの研修会はあれ依頼、中座しています。だから、今日のようなお話をもっと検証して、次の世代に伝える。

それと柳原さん、池田に荒木先生が手掛けられた、ああいう公園を作ってください。きれいな公園を、五月山のようなところに。モデル庭園みたいな美しい公園を造ってもらうのが我々の願いです。

原田

その当たりのこと、荒木先生の、いわゆる技術というのは、建設業界で継承していく。荒木先生は若い人に対してすごく熱心な姿勢を持たれ、最終的には学生を育てたいと、そういう話を聞きました。ただ、どうでしょう、先生の夢のようにも見えるのですが。いかんせん、日々の相場、需要、というか、なんかに向けて、自分に対してはマイナスな部分もないことはないのですけど。

田中（会場より）

荒木社長の活躍された時代と比べて、今の造園屋さんは庭づくりの仕事が極端に少なくなりました。

住宅の変化やガレージの必要性など、いろんな要因はあると思いますが、立派な個人庭に憧れて、造園の道に入った若い人達が、実際の現場とのギャップに諦めを感じているようなことも良く耳にします。

技能検定のお世話をしていますが、四つ目垣、飛び石、つくばい等の作業は、ほとんどしたことがないと思えるような方も珍しくありません。これからの業界を考えると不安になりますが、荒木社長の残された文化を少しでも継承して頑張っていきたいと思います。

上甫木

ちょっと質問していいですか。柳原さんとか、我々に近い世代は、常になにか考えながらものを造っていくという、作業の部分があったと思うのですが。今日の周りにいる人達もそうですが、描きながら何かモノをつくっていく、あるいは現場でモノを造っていく。そういう入り方と、プロセスはここ数十年で、ものすごく変わってきたと思うのですね。

その流れの中で、荒木先生がなさっていた仕事の入り方、進め方、そして現場でモノをつくるということ。

この三つの段階がなかなか体験出来ていない人たちが 40 代位になると、なかなか経験出来ていないと思うのですが。そういう流れのなかで今日、こういうお話しが聞けて、感動しているのですが。そういう流れの中で、果たしてこれがいつまで続いていくのかと、ということで、誰かが心配していかないと。継承している方からお話を。

荒木美眞社長

今日はありがとうございます。荒木芳邦の後を継がせてもらって丁度 13 年位になりますけど。今、若手が育ちつつあり、とても充実した会社になりつつあり、とても楽しみにしています。

芳邦が亡くなりました時期は、とても大変な時期もございましたけれど、みんなお手入れをさせて頂いていたお庭がありました。みんな色々な技術とか、お手入れの仕方とかで、色んな技術を随分、力をつけて来たような気がします。今、とても楽しみにしています。

今、こちらの庭を造る際に勉強会をしまして、芳邦が亡くなりました屋久島の小端積みを、後でじっくり見て頂きたいのですが、壁にあります石が屋久島のモノでして、あれをテーマにして造りました。これからも芳邦の心を継ぎ精進して参りますので、よろしくお願いいたします。

上甫木

先ほどちょっとご意見を頂いた衆議院議員の原田さん、こういう風にランドスケープも頑張っていこうと思っているのですが、今後どうしたら良いのか、メッセージをお願いできれば。

原田

今、先ほどお話させていただきましたように、ちょっと思うところがありまして。特に千里の万博の日本庭園をたまたま見に行きまして。どうも最初の庭と違うような手入れをされているのではと思い、職員さんにちょっと尋ねました。すると、入札で管理業者を決めているというお返事。安ければいい。ちょっと待て、それは違うだろうと、というような思いから。そのときは、実は万博庭園の委員をしておりました。機会があったら国へ出て、何か言ってやろうと。言い出しましたら、またその万博協会の大阪の担当を言われまして。やっぱり、私も池田生まれの池田育ちですから、おやじから、素晴らしい荒木さんをお前知らんのかと言われまして、ということでお話をさせていただいたこともありましたけど。やっぱり緑というのは日本の空間の一つですから、しっかり守っていきたいなあと思っています。

まだまだ駆け出しで、あまり愛想の良いことは言えませんけど。やっぱり、何でもかん

でも無駄で片付けられるような世界にならないように頑張っていきたいと思います。ありがとうございました。

上甫木

　みどりと庭園づくりに対して非常に心強いご意見をいただきました。時間となりましたので、第Ⅰ部の方はこれで終了させていただきたいと思います。ありがとうございました。

会場となった荒木造園設計社屋１階のカフェー・グリグリの庭園

第Ⅱ部　講演「都市は野生でよみがえる」

地球環境時代における都市再生のランドスケープデザインー

日時:平成 16 年 6 月 14 日(土)15 時～17 時
場所:大阪府池田市市民会館中会議室
講師　吉村元男氏（株)環境事業計画研究所会長
　　／前鳥取環境大学教授
進行：若生謙二　大阪芸術大学教授

若生

第Ⅱ部は吉村先生のお話で、地球環境時代におけるランドスケープデザインです。進行は大阪芸術大学の若生が進めさせていただきます。実は是非、次の機会に、こちらの吉村先生のお話をお聞きしたいと思っていました。先ほどのお話にもありましたが、一時代を築かれた作品をお作りになられた経緯、等々をお伺いしたいと思っておりました。吉村先生は今、マスコミを賑わせていらっしゃいますが、今年で 76 歳になられ、戦う造園家でもいらっしゃいます。

今日はその話ではなく、それに至る経緯を、なぜ、そのような思想を形成、あるいは作品を作られるに至ったかということをお伺いしたいと思います。

今、造園の仕事が少ない、公共事業が少ない、かつては先ほどお話にあった荒木先生が一時代をつくられた時代があったという話がありました。しかし、造園の仕事というのは誰かに与えられるのではなく、作り出していくことも私たちの仕事だと思うのですね。その当たりのノウハウといいますか、戦略といいますか、その当たりも、今日はお話が、お伺い出来るのではないかと思います。

吉村先生は京都大学を出られて、在学中から、文化人類学を開拓された梅棹忠雄先生と非常に深い交流をされ、探検部を通じての御交流であったと思うのですが。そういうところが、先生の作品にいかに影響したか、その当たりも先生からお話をお伺い出来ればと思います。先生、よろしくお願いします。

吉村元男先生

若生謙二先生

会場の光景

吉村元男 前言；今日は、「荒木芳邦と吉村元男の世界」というタイトルになっていますが、まず第一に、造園界の大先輩の荒木先生から吉村元男へ、どう造園的世界が時代の大きなうねりのなかで、どう継承されたかについて、千里丘陵で１９７０年に開催された大阪万博前後の出来事を通してお話します。次いで、ＥＤＡ造園地域計画研究所のち環境事業計画研究所の開設によって私が造園的世界になにを挑戦していったかについて、「都市は野生でよみがえる」という都市における自然再建をベースとしたそのデザイン思想、設計技術について三つの作品群からお話します。特に、１９７０年代の万博記念公園の設計では、生物多様性による生態系の再建を通した庭園都市の設計のあり方をお話したい所存です。

目次

1)継承の時代
井上造園事務所→ＡＩＮ造園事務所→ＥＤＡ造園地域計画研究所→環境事業計画研究所
2)生物多様性のある自然再建を目指す万博記念公園・自然文化園の設計
２－１；万博記念公園・自然文化園の基本・実施設計
２－２；大阪万博ＥＸＰＯ’70 から万博記念公園へ
２－３；万博記念公園・自然文化園は、生物多様性のある回遊式風景庭園（公園）
２－４；多様な生態系と出会える自然回遊風景庭園の風景づくりー４つの原則
２－５；三つの「み」＝みず・みち・みどりの組み合わせによる庭園の構成
２－６；三つの森が組み合わさって生物多様性の風景をつくるー密生林・疎生林・散開林
２－７;森を使って、風景をどうデザインするのか
２－８；３０年で森を熟成（第一次）させよ
２－９；生物多様性の森を創るー多様な生物棲息環境をどう創り・維持するのか
２－１０；道がつくる風景デザインー自然廻遊ｓ機風景庭園の骨格
２－１１；水辺の回遊風景のデザイン
２－１２；原っぱ・草地・サバンナの風景デザイン
２－１３；ソラード・森の回廊ー猿と鳥の目線から風景を楽しむ
２－１４；万博の記憶を引き継ぐ風景
3)庭園都市のデザインー歩ける都市の設計
３－１；南港ポートタウンー水と緑のインフラストラクチュア
３－２；神戸ハーバーランド・モザイクー港街をめぐる修景運河
３－３；芦屋浜シーサイドタウンー歩車分離の街
３ー４；京都桂坂ニュータウンー中自然都市
4)新梅田シテイの公開空地ー空地は、どうして生みだされたかー
４－１；造園家の仕事は、「空地」を生みだすこと
４－２；建築家と造園家のコラボレーション
４－３；環境創造都市ー良好な環境を生みだすためには建築家は譲歩しなければならない
４－４；都心に、垂直宇宙軸のランドスケープをつくれ
４－５；滝を内側から見るランドスケープ
４－６；森を核とした都市；中自然の森＝地球の庭
４－７；７つの滝が創る｛地球の庭｝
４－８；水が巡る水脈都市
5)文明的自然の領域からのコメント
５－１；文明評論家梅棹忠夫氏
５－２；作家高村薫氏
５－３；風土論オーギュスタン・ベルク氏

1）　継承の時代；井上造園事務所→AIN造園事務所→環境事業計画研究所

○井上造園事務所からAIN造園事務所へ

京都大学農学部林学科（造園学専攻）を卒業して、京都の老舗造園で井上卓之造園設計事務所に採用していただきました。ほとんどが職人さんのなかで給与で働くのは私一人でしたが、桂離宮、修学院離宮などの宮内庁庭園や、妙心寺などの京都の名刹の庭園の監理、手入れの仕事があり、日本庭園の真髄を真近で見、実体験する貴重な機会を得ました。さらに、井上師匠は、１９６４年頃、国立京都博物館の造園改造の設計を受注され、造園設計について教えられたと同時に、その庭園工事の現場監督に従事する幸運を得たことで、設計者の意図が、どう現場に収まっていくのかをこの目で確かめられたのでした。

国立京都博物館の造園改造の設計は、国立京都博物館の明治建築が手狭になったために、京都大学の森田教授が、敷地の北に東西にコンクリートの新しい陳列館を増築することによって生まれた中央庭園です。庭園設計は斬新なデザインでした。なによりも驚いたのが、井上師匠が、コンパスで円を描かれた、見事な植栽の造形美でした。コンパスで円を描かれた素晴らし近代的な庭園の設計は、京都府山陰の城崎温泉の西村屋旅館の庭で知っていました。コンパスなどの幾何学模様で、日本庭園が構成されると言うのは、庭園のどの本にも出ていなかったので、近代日本庭園デザインの井上師匠の名作だと感銘をうけました。

しかし、伝統的な庭園を主たる業務の井上事務所では、当時、都市化やニュータウン開発で重要が高まっていた公園や緑地などの造園設計の仕事はありませんでした。大阪では、既に近代造園家グループが東京からも支店を出し、日本で最初の香里や千里ニュータウ、さらに名神高速道路などの現代造園設計業務を受注していました。京都にある井上造園設計事務所は、地の利もなく、これらの業務を受注するのは不利でした。設計業務が少ない現状に鑑み、私は、井上師匠に大阪に井上造園設計事務所の支店を出すことをお願いし、了承され、大阪の「中の島地区」の佐藤花店の二階で開設しました。念願の住宅公団の仕事を受注し、最初の仕事を、井上師匠が設計しました。私が狙っていたように、西村屋や博物館庭園でみた京都の日本庭園を加味した慚新な近代造園設計が千里ニュータウンに実現したのです。このような状況が数年続いた後、突然、荒木造園設計事務所（兵庫県）、西川造園設計事務所（大阪府）、井上造園設計事務所（京都府）の三者合同で、一つの事務所を創るということになりました。大阪万博が、千里丘陵で開催され、会場設計に合わせて、造園の仕事を受注しようという狙いがありました。それぞれの事務所のイニシアルを新事務所の名前にしてＡＩＮ造園事務所が誕生したことは画期的な出来事でした。大阪、兵庫、京都のそれぞれの地域で日本庭園の伝統を受け継ぎ近代造園を手掛けている関西の三社の雄が結束して、大阪万博の造園事業に立ちあがったのですから、関西造園でも大きな出来事として注目されました。わたしは、ＡＩＮ造園事務所の現場責任者として赴任しました。大阪市西区京町堀、靱公園の近くで、１９６５年のことでした。

○大阪万博会場の造園設計の仕事

１９７０年に開催される大阪万博の会場の設計は、１９６６年頃から始まりました。造園の分野として二つありました。一つは、万博会場３００㌶のなかで、約１２０㌶が実質的な会場で、１００㌶がお祭り広場とパビリオン展示会場で、展示会場の北に東西に細長く「万博日本庭園区」（約２０㌶）が設定されました。造園界が世界から訪れる人々に展示する施設として力を入れた庭園です。これは古代の庭園から近世の庭園までの日本庭園の推移を展示する施設でした。これに関しては、ＡＩＮ造園事務所では担当しませんでした。ＡＩＮ事務所が担当したのは、１００ヘクタールの万博主会場の造園でした。しかし、この会場設計は、中心軸に設けられたお祭り広場とそこから放射状にひろがる道路と水路による国や外国のパビリオンや企業パビリオンが展示される展示地区によって、主として東京大学の丹下健三氏によって決定されていました。ＡＩＮ事務所に与えられた造園設計の分野は、既に決定された会場の道路、水路、池等に沿った街路樹、休憩スポットなどに限定されたもので、１００㌶の広大な会場（都市にもなぞらえた）で、我々造園家が、会場の都市構造にまで口を出す機会は、既に失われていたのです。会場は、それぞれの派手で絢爛たる衣装をまとった異様な形をした建築群が、巨大な怪獣がうなりをあげて、狭い区画に全員集合した様な雰囲気で構成されていました。造園空間は、会場中央に東西にのびる水面以外に、緑は少なく、未来の都市は、怪獣的な建築群が林立する巷であることを予言するかのようでした。この会場に、半年で６５００万人の人びとが押しかけたのです。

○丹下健三先生との出会い

私は、関西で開催された世界的イベントに、造園家として力を発揮できなかったことに、悔しい思いがしました。会場設計の時期に、会場のわずかな造園空間についてのＡＩＮのスタッフがデザインした図面をもって、東京の代々木公園の横にある万博会場総合プロデューダ―オフィスがある丹下健三事務所を訪れました。丹下先生に会うために。全国から多くの人々が丹下先生の会場の諸施設の承認を求めて行列をしていました。大きなホールがあり、そこでお祭り広場の大屋根の大きな模型がありました。人がその下で作業ができるくらいの高さの巨大な模型でした。私が驚いたのは、そこで岡本太郎画伯が太陽の塔の模型づくりを夢中になってしていたことです。お祭り広場に懸ける並々ならぬ丹下先生たちの熱意に感銘を受けたのを今でも覚えています。

私が丹下事務所を訪れたのは午後の早い時間でしたが、丹下先生と会えたのは午後１０時ころでした。丹下先生はその間ずっと外部の人と設計の打ち合わせをしていたのでしょう。私が、会場の造園設計のための面会の趣旨を伝えると、今日は時間がないので、明日の早朝に再度打ち合わせしようということになりました。東京に一泊して早朝に事務所を訪れると、丹下先生は、いきなり造園設計は樹木の配置が重要でありそこを認識して設計にあたってほしいと注文をつけられ、それでは、丁度いいモデルがあるから、「私が設計した代々木体育館の横の造園空間を観察しなさい」ということで、丹下先生に直々に代々木体育官の横の植栽地を見学することになったのです。この時、丹下先生の建築だけではなく、造園空間においても絶対的なデザイン哲学を持たれているのだと感銘を受けたのを今でも覚えています。しかし、丹下先生の直々の指導にも拘わらず、会場の造園設計では、設計対象の空間がわずかで、力は発揮できなかったことが非常にくやしい思い出今でも残っています。結局、建築家主導の下での都市設計には、充分な造園空間が生み出せない現実に、衝撃を受けたのです。

○AIN造園事務所から、EDA造園地域計画研究所（㈱環境事業計画研究所）へ

この時期、ＡＩＮ事務所の受注は、万博会場設計以外にも、京阪神の公共造園の仕事をしていましたが、万博の仕事も終わり、ＡＩＮ事務所は解散することになりました。ＡＩＮのそれぞれの事務所から派遣されてきたスタッフは、それぞれの事務所から出向ではなく離脱していましたから、新入りの所員も含めて失業状態に陥り、やむなく、１０人前後のスタッフを集めて、仕事もないままに、事務所を創りました。それが、ＥＤＡ造園地域計画研究所であり後の環境事業計画研究所だったのです。１９６８年８月でした。

万博は１９７０年の春に開催され、秋に終了しました。

○万国博覧会跡地利用懇談会は、万博会場の跡地を「緑に囲まれた文化公園」にすることを決定した。

開催中から、万博跡地の利用が盛んに討議されました。関西の財界はこぞって、東京一極集中の是正のために、万博跡地には、国の行政機関や中枢管理機能を持つ施設、大学や研究機関を集中的に立地させる研究学園都市等の建設、あるいは東京が災害にあった場合に首都機能を補完できる第二の行政府をつくれなどの案が出されました。開発コンサルタントは、模型まで作って財界案を提示しました。しかし、１９６０年代から１９７０年は、各地で公害が続発し、大阪でも光化学スモッグの大気汚染、水質汚濁で人々が苦しめられていました。都市のこれ以上の開発や自然破壊は避けるべきだと言う気運の基に、広大な万博跡地３００㌶は、大蔵大臣（現財務大臣）の諮問機関高山英華東大教授を委員長とする「万国博覧会跡地利用懇談会」において「万国博の跡地は、日本万博博覧会を記念するひろい意味の＜緑に包まれた文化公園＞にする」という基本的な方向が答申されました。これは画期的な英断でした。この中で、「跡地のすぐれた立地性とまとまった広さを最大限

生かすと同時に、＜人類の進歩と調和＞というテーマに基づいて行われた万国博を記念する国際性をもった、新しい国民的財産をつくることを意図したものである」としています。さらに、跡地に再建される「緑」については以下のように述べています。

「緑とは、人類の著しい技術進歩のなかで忘れられ、失われつつある自然環境の総称であると考える。今日、緑に求められているものは単なる慰めではなく、人間の生活環境を維持することである。人間の活動と自然の緑の環境にはお互いに調和した共存関係が必要であり、我々の活動が瀕死に陥れた自然生態系のいくつかを、人間の知恵と技術によって復活させ維持する方法が緊急に追求されるべきである」。ここでは、明確に、「自然生態系の復元あるいは再建」としています。

○奇跡の万博記念公園・自然文化園

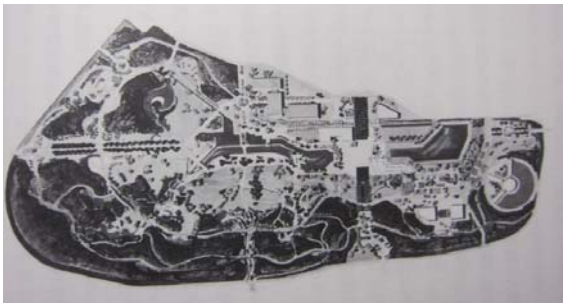
１９７１年３月、高山英華東大教授が顧問をする都市計画研究所で「万国博覧会記念公園基本計画」が策定されました。その中の専門委員であった高橋理喜男大阪府立大学教授（当時）が、私の事務所「環境事業計画研究所」に基本設計・実施設計の依頼をされました。１９７２年６月（設計受注）でした。

万博記念公園は、二度の奇跡で自然豊かな公園に出来上がりました。第一は、高山委員会での開発から自然再建への決定です。第二は、万博記念公園・自然文化園の事業主体が大蔵省であったことです。当時（１９７０年代）の建設省（現在国土交通省）では、大規模都市公園の整備方針に、「自然生態系の復元あるいは再建」という考え方はありませんでした。公園内に大規模な森を造成することは、見通しが悪くなり犯罪を誘発するということでダメでした。川や池を創る場合は、水死の場合の補償が必要だという理由で水辺の全てに柵を設けること。さらに、芝生には立ち入らないようになどが設計事項としてありました。１９７１年、万博記念公園・自然文化園が、答申どうりの「自然生態系の復元あるいは再建」を背景にした「生物多様性のある自然回遊式風景庭園」が可能になったのは、大蔵省が万博記念公園・自然文化園の発注者だったからです。生態系の再建を旗印にした大規模公園の日本最初の歴史的事件でした。生物の多様性を目指した大規模公園は、世界でも類がない都市公園としての自然再建の実験であり、まさに奇跡としか言いようがない事業のスタートでした。

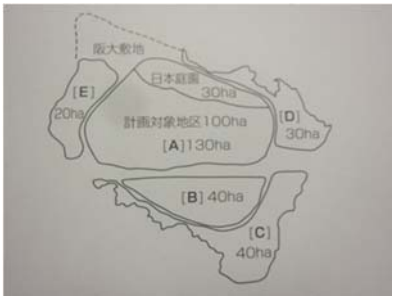
2)生物多様性の自然再建―万博記念公園・自然文化園

2－1;万博記念公園・自然文化園の基本・実施設計

万博記念公園・自然文化園の設計は、私にとって、大規模公園を舞台に日本の自然理解の伝統を如何に、現代造園へ展開していく上で、大きな機会を得るものでした。１００㌶にも及ぶパビリオンが撤去された裸地を、造園空間としてどう設計するのか。これだけの広い土地に、３０年の短期間で、森を熟成させるにはどのような植栽の技法をつかえばよいのか。いったいどのくらいの量の植物が必要なのか。難問続出でした。この業務を契機に、「一旦開発され、破壊された土地の自然再生」という課題が、私の事務所の仕事の大きな柱になりました。１９７１年当時、ビオトープという言葉さえありませんでした。私は、ビオトープという言葉ではなく、「沼」という言葉で水辺を、「 鎮守の森」という言葉で「密生林」を、「雑木林」という言葉で「疎生林」を、「原っぱ」という言葉で草地・芝生地・「散開林」をそれぞれ設計しました。樹林の樹木の植栽密度の違いから分類された三つの森を、縦横に組み合わせることによって、生物の多様性のある風景を人工的につくることで、裸地に、豊かな生態系のある大規模公園が生まれたのです。１９７０代の初めの、多様な生態系からなる自然再建を目指した大規模公園は、、日本では初めての画期的な自然再生事業となったのです。

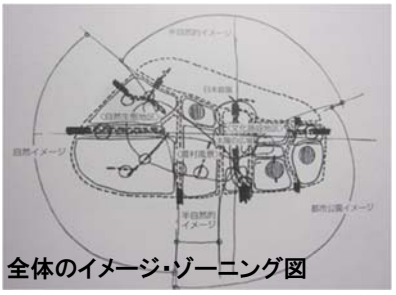


環境事業計画研究所が最初に提出した自然文化園地区基本設計図（対象100㌶）

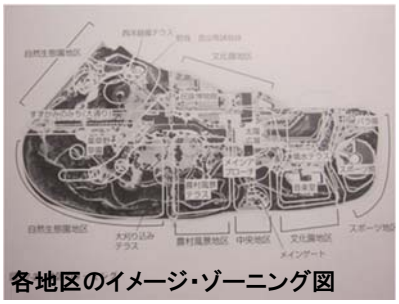


万博記念公園は全体で260㌶。自然文化園地区はAの万博会場であった100㌶が基本設計対象地区

全体植栽図



全体のイメージ・ゾーニング図



各地区のイメージ・ゾーニング図

2－2;大阪万博EXPO’70 から万博記念公園へ
○万博記念公園・自然文化園完成までの流れ

大阪万博ＥＸＰＯ‘７０は、千里丘陵の里山・田畑を切り開いて開催されました。（右上図）

万博会場は、ほぼまっ平らに造成され、会場が姿を現わしました。１９７０年、半年の期間中に、６７００万人の入場者がありました。（１図）

１９７１年、会場は、日本庭園（３０㌶）を除き日本政府館、各国政府館、企業館などのパビリオンが撤去され、ほぼむき出しの土がまっ平らに造成された砂漠の様な「裸地」が、現れました（２図）

その「裸地」に土を盛り、植栽をし、約１５年経過した時期の、万博記念公園です、自然文化園地区に、空からも判別できる緑が、蘇ってきました。（３図）１９８５年の自然文化園地区の航空写真です。

右図は、最初に提出した基本設計図から最終図面として完成した基本設計図です。

開発される前の千里丘陵

万博記念公園・自然文化園の最終基本設計案

2－3;万博記念公園・自然文化園は、生物多様性のある回遊式風景庭園（公園）
○歩いて楽しむ自然文化園の風景づくりを目指す

万博記念公園・自然文化園の設計では、多様な自然を歩いて楽しめる風景を創ることを主眼にしました。大規模な公園で有名なのは、格子型放射状の道で構成されたフランスの整形式庭園と狩猟地が開放されて造られたイギリスの自然風景式庭園があります。万博記念公園・自然文化園の風景は、生物多様性のある生態系の再建を目指し、その生態系を公園の風景として創りあげる手法を設計として採用しました。万博記念公園・自然文化園は、温帯気候の植生に特有な照葉樹林、人の手が加わった落葉樹林、草地・ハラッパの三つの原風景を縦横に組み合わせた多彩な風景スポットを巡る「大規模庭園」で、一言で言えば「生物多様性のある回遊式風景庭園」という新種の庭園です。

左;密生林、疎生林、散開林の三つの森が縦横に入り乱れ、組み合わされることによって多様な生態系のある風景が生まれる。
上;密生林の中の上津道沿いにながれる小川。豊かな生態系が歩く風景のなかで再建できた。

2－4；多様な生態系と出会える自然回遊式風景庭園（公園）の風景づくり―4つの原則

○風景をつくり、楽しむ自然文化園

大規模都市公園として位置づけられている万博記念公園自然文化園は、自然地を背景にしたレクリエーションの場を設計することが目標です。一言でいえば、「多様な生態系と出会える自然回遊式風景庭園（公園）」になります。そのために自然の風景をどのようにつくり、どのように配置し、来訪者にどのように利用してもらえるかが課題になりました。

目標は４つあります。

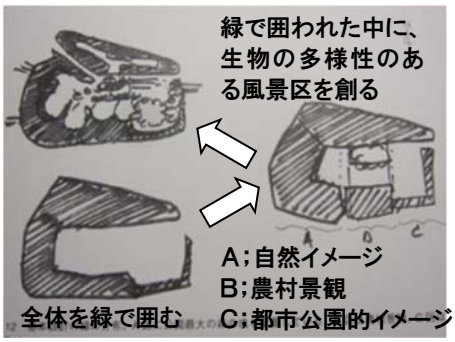
１；安心してゆったりと歩き、休息し、遊べる回遊式の自然公園をつくること。

２；生物の多様性のある生態系を再建し、公園の骨格になる自立した森を育成すること。

３；裸地から自然を再建する技術と多様な生態系を風景としてデザインする技法を開発すること。

４；２００１年までに、第一次熟成した生態系を創り出すこと

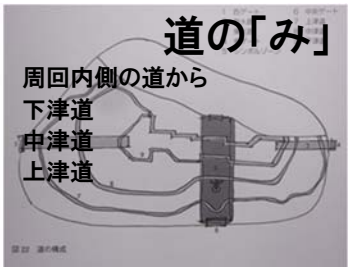
風景づくりの基盤は、濃い緑で額縁をつくること



2－5；三つの「み」＝みず・みち・みどりの組み合わせで、回遊式の自然風景庭園を構成する

○三つの「み」；緑・道・水のそれぞれの頭文字「み」の組み合わせ

三つの「み」の組み合わせによって、限りないほど多くの生物多様性の風景をデザインできます。生物多様世のある回遊式自然風景庭園（公園）の基本デザイン手法です。



左；密生林の緑の「み」と上津道の道の「み」の組み合わせの風景

中；散開林の木陰の緑は、密生林の緑の囲まれている。
右；疎生林の緑の中から、流れ落ちる滝の水。

2－6；三つの森が組み合わさって、生物多様性の風景をつくる―密生林・疎生林・散開林

○森の三つのタイプ；密生林・疎生林・散開林

森を植栽樹木の密度によって、密生林、疎生林、散開林の三つのタイプからなるものとしました（基本計画から）。この分類は森を群落として分類する手法とはことなります。風景をデザインするには、群落分類ではなく、樹林密度による分類が効果的です。三つのタイプの森を縦横に組み合わせることで、生物の多様な風景がデザインできるのです。

密生林を背景に、散開林が広がる。散開林を河原が流れる

疎生林―落葉樹林と常緑樹林が混ざり合う

森の三つのタイプ（基本計画から）
密生林・疎生林・散開林

図14　三つの森の配置（基本計画）

表1　三つの森と特性（基本計画）

特性項目＼樹林型	密生林	疎生林	散開林
特性	自然の再現（自立した森）を目指す常緑樹を中心とした樹林であると同じに、外部の様々な悪影響（騒音、排ガス、強風等）を遮断する重要な役割も果たしている	落葉樹を中心とした比較的明るい樹林。魅力あるスポットを配し、景観の変化を楽しむ	芝生を中心とした明るく広々とした空間
樹林被度	70～100%	50～80%	10～20%
林床	きわめて少ない	ササ、ススキ、野草	芝生
灌木	耐陰性樹種	二次林の構成種	低い刈込
利用度	低	中	高
行動の自由度	小	中	大
主な利用内容	散策、自然観察	休養、散策、観賞、自然観察	休養、観賞、ピクニック、軽いスポーツ
保育管理	自然の生態系による	下刈り、落葉掻元、間伐	刈込、施肥、灌水
主要樹種	シイ、カシ、クス、シロダモ、ツバキ等	クヌギ、アベマキ、コナラ、ナラガシワ等	ムク、エノキ、クス、カシ、シイ等
計画面積	80ha（外周部保存緑地約40haを含む）	35ha	10ha
イメージ			

密生林　　疎生林　　散開林

密生林の中の小道

散開林の原っぱを中心に、手前は大きな池と潅木の刈り込み。向こうに、西大路並木と密生林の樹林がある。

2－6－1；密生林・照葉樹林

○密生林の役割

三つの森の使命は、その組み合わせによってどれほど多様な生物棲息条件を創りだせるかがカギになります。密生林はその規模が大きいほど生物多様性は大きくなります。そのために帯状ではなく塊状に配置するのが望ましい。公園的利用では、暗いイメージで親しみがないが、自然生態系の再建を目指す万博記念公園・自然文化園では、密生林こそ、自然再建の中核を担う森になります。

森の再建には、湿り気が必要です。自然文化園の密生林地区では、森が熟成する時間を短縮するために、密生林の中に小川を縦横に配置し、小川から蒸発する水分が、乾燥しがちな森に湿り気をもたらし、森の早期生育に寄与します。（右下写真）

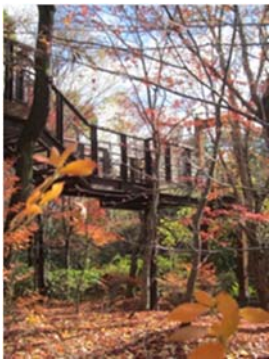
右；木漏れ日が地面に模様を描く。密生林地区の上津道。多くのジョギングの来訪者が、夏の暑い日差しを避けた、この道を歩きます。

密生林地区では、森の促成栽培のために、幼樹苗を密植しました。その結果、モヤシ林のようになったところが散見されます。維持管理では、間伐をし、自立した森への転換が図られています。

2－6－2;疎生林

○疎生林という名の雑木林

疎生林には、多様な生物の命が満ち溢れています。雑木とは多種多様の樹木が仲良く場所をわきまえて育っている様です。だから、そこには人も集まってきます。梢を通して太陽の光が地面に届くからです。



上左;四季の訪れをいち早く告げる疎生林。森の中に太陽の光が差し込む。明るい森。多種多様な形と色と背の高さの違い野ある樹木たちが、一つの場所に生育している。それは生きものたちの心地よい環境を創っている。上中;紅葉の真っただ中の疎生林の中の森の回廊。上右;疎生林の下の集会場。暑い日差しを避けて木陰に集まり、お弁当を広げます

2－6－3;散開林

○原っぱは、日本人の原風景

住宅が密集し、道路が網の目のように走る平野に立地する日本の都会では、もはや平地の原っぱは全く姿を消しました。しかし、ずっと昔は、平地には草原や草地があり、こどもたちはのびのびと遊んでいたに違いありません。原っぱは日本人の故郷であり、原風景でもあるのです。

上;散開林の大樹の下の集会場。暑い日差しを避けて木陰に集まり、お弁当を広げます。
右;冬の日差しが、長イスを暖める

2－7:森を使って、風景をどうデザインするのか
○閉じた森と開いた森一風景と言う部屋
みどりの舞台で、みずとみちが散策の風景の物語を創る

１００㌶もの裸地に、森をどうデザインするのか。そこで考えたのが、森を舞台にして風景という部屋を創る手法です。森が舞台であるなら、閉じられた森と開かれた森にすると風景デザインがやりやすい。そこに、道と水をどうからませるか。その時、水と道は風景の主役になります。

開かれた散開林の中に、一本の小さな小川が流れる。子供たちは小川に沿って、森の縁を移動する。

開かれた疎生林に向かって一本の道を創った。落葉樹の明るい森へと導く、柔らかい土の道を歩くと、森への期待感がいやがうえでも湧き上がる。

閉じられた森

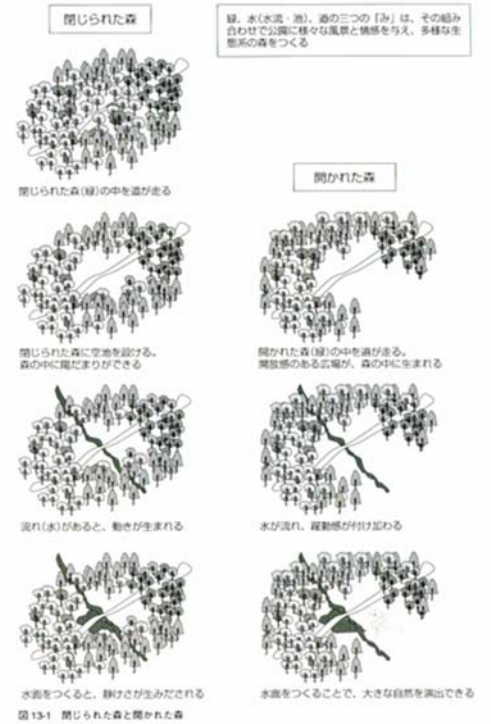


図13-1 閉じられた森と開かれた森

○閉じられた森一森の舞台

密生林の中にぽっかりと空いた空地。その閉じられた森に陽だまりのある静穏な時間が流れます。密生林の暗く冷ややかな空気の中を流れて来た小川は、明るい原っぱに出てきて水面をキラキラ輝かせる。人も密生林の上津道を歩いて、光の原っぱに出る。森の中の原っぱで、人と水が出会う。

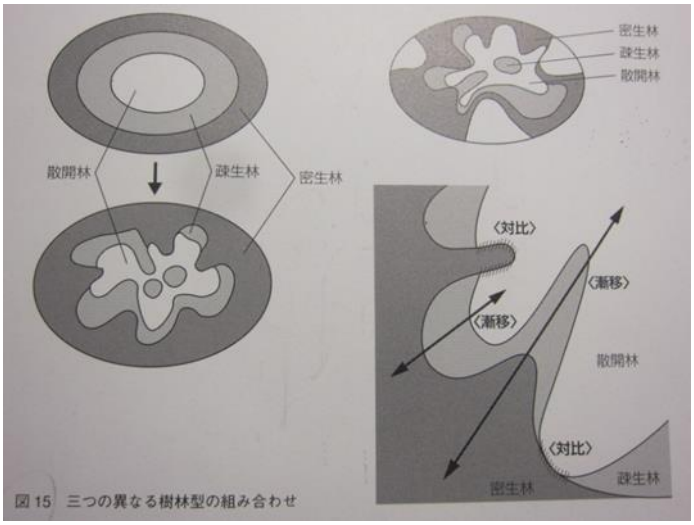
密生林で閉じられ、囲まれて原っぱがある。森の中にぽっかり空いた草地の広場。人々は森に囲まれて太陽の光の中を浴びる。

密生林から流れ出た小川。陽光に照らされキラキラ輝く

○三つの森の接線を長くする

密生林、疎生林、散開林をどのように配置するか。基本計画ではそれぞれが同心円状に配置されていました。多様な生物の棲息条件を確保するために、三つの森の接線を複雑化し、さらにその接線の延長を（右図）長くする。これによって、例えば密使林と散開林が直接接することで、多様な生態系が確保できます。

密生林・疎生林・散開林が組み合わさって、生物多様性の生態系をつくる



生物多様性の風景をつくる森の配置の手法図
密生林・疎生林・散開林がお互いに接することによって、生物の多様性が確保され、生命に満ち溢れた風景画つぎつぎと生まれる。

○公園の魅力を、風景の多様化で確保する

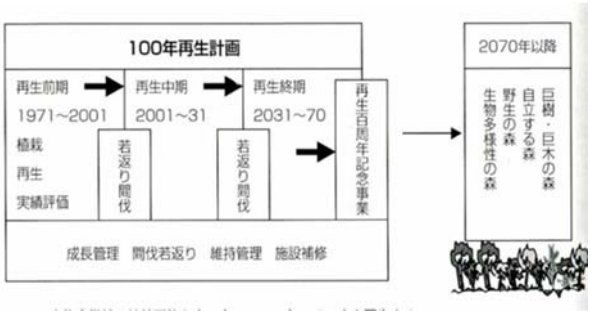
公園の魅力は、自然景観の多様な変化にあります。明るさと暗さの変化、静けさと動きの変化、華やかさと落ち着き等の変化等の変化の組み合わせの妙によって醸しだされます。明るい森（散開林）と暗い森（密生林）との直接的な接触によって、双方の魅力を倍加して楽しめます。人びとは深い緑を背にして、明るい森に向かって休息を取ります。深い緑に絶大なる安心感を持っている証左です。

そこに、ベンチを置くのです。

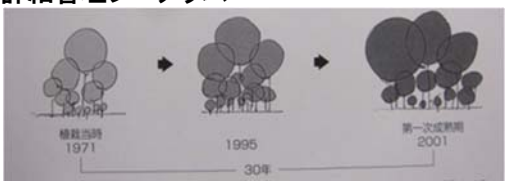
2－8;30年で森を熟成（第一次）させよ

○1971年から2001年の30年間で、第一次の熟成した森をつくれ！！

大学での林学科で学ぶのは杉やヒノキの造林学で、いずれ伐採され木材に利用される森林でした。永遠に伐採されない森を短時間で育成する知識や技術は皆無でした。３０年で熟成した森を創ることは、「森の促成栽培」です。どうすれば森を栽培できるのか。そこで参考にしたのが、神社の森でした。橿原神宮、近江神宮等は献木された人工だが禁伐の森であり、そこから永遠の森の創り方について学びました。千里の土壌は青粘土質で、水はけも悪く、パビリオン残存構造物等があり、植栽は困難を極めました。初期には、枯死苗木がでましたが、１９８０年代後半には鬱蒼とした森が蘇ってきました。自然再建手法はエコロジー緑化やビオトープ、或いは里山という概念を使ったと指摘されていますが、それは間違いです。これらの概念は１９８０年代後半から西欧から輸入され、里山ブームのもので、万博記念公園自然文化園の設計とは全く関係がありません。



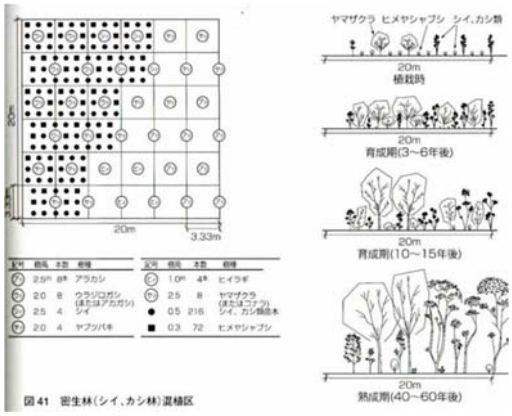
100年の森に向けての詳細管理プログラム



自然文化園の基本設計・実施設計の条件として、植栽時（1971年開始）から30年で目標の第一次成熟期（2000年）とすること。その後は、2070年を目標として生態系を熟成することとされた。

○30年で、森をつくれ！！

景観的な要請もあって、ある程度初期の段階から見られる森を創らねばなりませんでした。庭園をつくる場合は、高木を植栽し、植栽工事の完成時に庭園が完成ということになるのですが、数十万本もの樹木を植栽する万博公園での植栽は、苗木を植栽し、それらの成熟を待つしかありません。そのためには、３０年の第一次熟成の目標に合わせて３年～１０年単位くらいに苗木がどのように生育し、生態系を生み出していくかの予想を建て、それに従って、苗木を植栽していくプログラムを作成しなければなりません。右図は植栽当初の植栽図と生育目標プログラムです。下図は、植栽がどのような生態系を作りあげていくかの、生物指標と地形造成の基本設計図の概略図です。



密生林（シイ・カシ）混植区の初期植栽図と生育段階の生育予想図

○森は、蘇りつつある

植栽後5～10年経過の森（1975年頃）。パビリオンが撤去された跡に植樹した当時の西の丘からの風景。丹下健三氏の大屋根と太陽の塔が見える。

植栽後30年以上に経過した同じ場所からの、森の風景。手前に密生林。紅葉しているのが疎生林。左上に、かろうじて太陽の塔が見える。

○森は、蘇りつつある

1970年

日本最初の万国博覧会が大阪で開催された。半年で2600万人が訪れた

1970年代後半から1980年代

植栽のための盛り土と土壌づくり
パビリオンが撤去された地盤に土を施し、公園の造成地には植栽土を加え、植栽した。

植栽後7～10年を経過した風景。幼樹が育ち、ようやく森の形が僅かながら見えるようになってきた

1990年代

万博記念公園には、大阪万博EXPO '70の記憶が眠っています。

2－9;生物多様性の森を創る一多様な生物棲息環境をどう創り･維持するのか
○野鳥の棲息する風景をつくる

森の配置の重要な狙いは、多様な生物環境をどうつくるのかということです。多くの生物の住処になる場所・環境をどう保障するかです。それが、生物多様性の持続可能な１００年の森づくりです。そのためには、森を創ってから熟成するまでどう維持管理していくかということも重要です。子供の誕生とそして大人になるまでの教育をどうするかです。

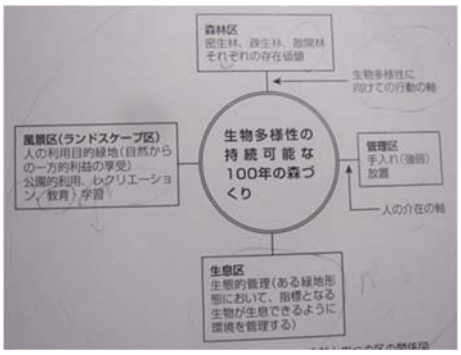
そこで、１００㌶にもなる広大な自然文化園を四つの区として生物環境づくりの指針としました。（右上図）

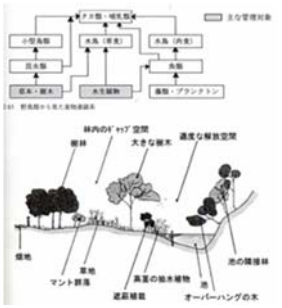
１；森林区一密生林・疎生林・散開林

２;棲息区一その環境において指標になる生物を設定し、その生態系を創り、維持する

３；風景区一その生物環境が、来訪にどのように使われるのか。公園的利用

４；監理区一手入れ、灌水、除草など





上図;生物指標タカが棲息する食物連鎖と環境の模式図。

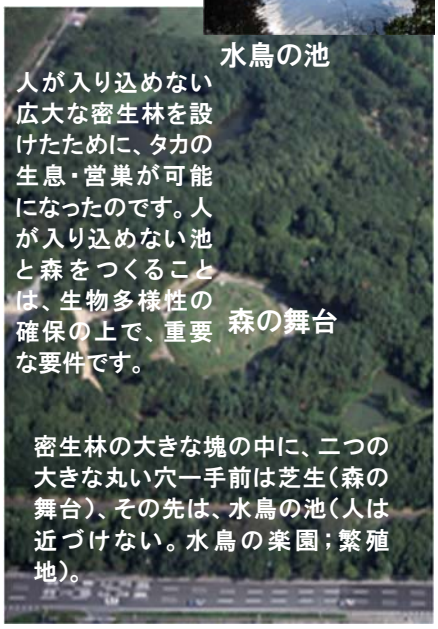
2－9－1;タカが生息し、渡り鳥が営巣する森
○野鳥の棲息する風景をつくる

万博記念公園の自然生態系を再建するうえで、最も重要なスポットと考えたのが、「水鳥の池」（右図）とそれを取り巻く大きな塊の密生林です。この水鳥の池には一か所を除いて人が近づけません。野鳥の森と名づけている場所の野鳥の観察小屋の小さな窓からだけ池を覗くことができます。池の中央に半島がつき出て、人の目線が届かない場所をつくりました。人の気配を遮断した場所で営巣ができるようにしました。

植栽後３０数年後にタカがこの密生林に営巣することが確認されました。タカは生物多様性の象徴的存在です。再建された万博記念公園の森が、タカを頂点とした生態系にまで熟成してきたことを物語っています。都市に囲まれた公園の自然性がここまで育ってくる可能性を証明することができたのです。

右;水鳥の池一鳥の繁殖場所。鳥から人影が見えないように、観察小屋からしか、見ることができない。

水鳥の池

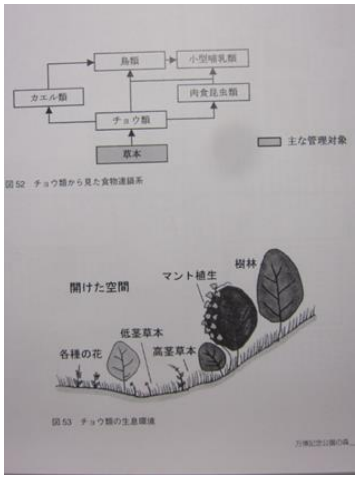


２－９－２；チョウが飛び交い、モリアオガエルが棲息する風景を創る

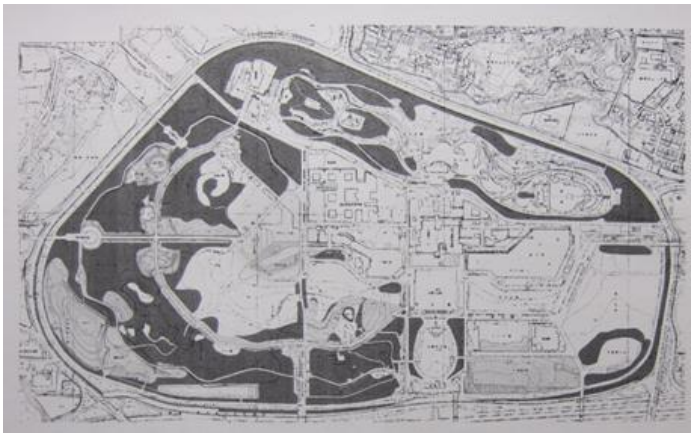
○チョウの棲息する風景をつくる

同じ時期の棲息状況調査ではチョウ類の調査がなされました。８科３３種のチョウ類が確認されました。モンシロチョウ、アオスジアゲハ、ヒメウラナミジャノメ等、農耕地や住宅地のような都市郊外型の人工的な植生環境に生育する種が多く棲息していました。一方、チャバネセセリ、トラフシジミ、キタテハ、ジャノメチョウ等、里山周辺で見られる種は少ないという調査結果でした。チョウ類は移動能力が高いため、今後周辺地域からの飛来が期待されます。

チョウ類からみた食物連鎖にありますように、チョウ類の棲息は、カエル、肉食昆虫類、小型哺乳類、鳥類の棲息条件を創っています。植栽後４０年経過して、モリアオガエルが棲息していることが確認されました。都会の真ん中にあって、野生の自然の宝庫になりつつあります。

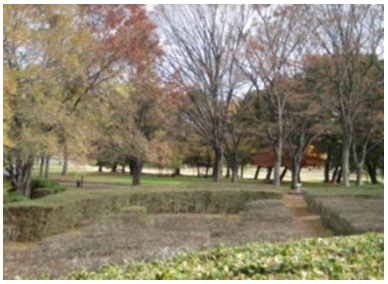


巨樹の木陰で、水面と陸地をつなぐ緩やかに連続した斜面の地形が生物たちの繁殖の場をつくる



野鳥の生息状況。1985年
引用「緑の調査」－生物の棲息環境づくりをめざした管理手法

上；密生林に囲まれた湿地（沼地）。明るい日差しが水面に映え、多くの生命を宿す。チョウや昆虫、モリアオガエルの繁殖適地の風景



右上；疎生林の低木層にデザインされた大規模潅木刈り込み群落と草地。豊かな生態系が生まれる風景。
右；密生林の林縁を流れる小川。森林に湿り気をもたらし、生物多様性の生態系を創る。

2－9－3;農村風景地区一生物多様性の宝庫

○農村風景地区

千里丘陵里山を切り開いて開催された大阪万博ＥＸＰＯ‘７０会場は、それ以前にあった農村風景を全く消滅してつくられました。パビリオンを撤去した万博跡地に、自然の再建を目指して創られた万博記念公園は、単なる自然再生ではなく、千里の原風景であった農村の文化風景を回復することで、自然再生の一環を担わせることにしました。竹林、梅林、茶畑そして水車小屋のある農村の風景すなわち農村の風景は、生物の宝庫です。生物の多様性を目指す万博記念公園では、文化としての緑の継承が、緑化回復の大きな柱の一つでもあるのです。

農村風景。この地は万博当時月の石を展示したアメリカ館があったところ。

疎生林に囲まれた茶畑の風景

農村地区に設置された水車のある風景。近郊の北摂地域から移設された

2－9－4;森と灌木の組み合わせ一森への誘い

丸く刈りこまれた灌木が、石だたみの小道をやさしく迎え入れる

密生林を背景に、水平の灌木群と散開林がつくる躍動感溢れる樹木たちがつくる風景

右;水辺から疎生林へと誘われる刈りこまれた灌木の間の小道

散開林から疎生林へ。丸く刈りこまれた灌木の群れが並んで人びとを森へと誘う。常緑と落葉の樹林。灌木がその下部層を覆う。さまざまな植物群が組み合わさって、生物多様性の正解を創る。

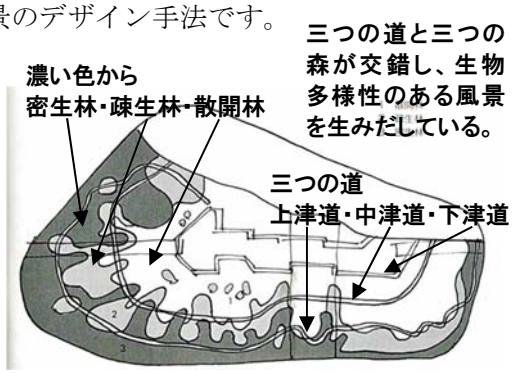
2－10;道がつくる風景一自然廻遊庭園の骨格

○道は単純明快、風景は多彩で変化に富む

多様な生態系の舞台を歩いて移動する訪問者の視線を、ゆっくりと次々と魅力のある風景へと誘うためにどのような道をつければよいか。湾曲し、それぞれが接線を共有する密生林、疎生林、散開林の森を右下図のように、串刺し状に貫くように、道をつけることで、上津道、中津道のそれぞれに多様な風景が散策者の視線に飛び込んでき、移り変わっていきます。鬱蒼とした森を過ぎれば、紅葉や桜の様な四季折々の変化のある森が現れ、さらに進めばひろい原っぱに出会う。そこには静かな水辺が周囲の森を映しこんでいる。風景の変化を巧みに縫い込んで、散策の人を飽きさせない工夫が、道の設計に求められる。道は明解で単純な構造でなければならない。なぜなら、森の中の迷路は、迷子になる危険をはらんでおり、快適さを不安に駆りたてる。道を環境、風景を、三つの森の配置によって、道の風景を変化させること。これが重要な道の風景のデザイン手法です。

右;中津道を散策する来訪者。散開林からゆく手に疎瀬尾凛が展開する。その向こうにランドマークの太陽の塔が見える。迷うことはない。

左;上津道を散策する来訪者。深い密生林の森を抜け出た明るい日差しのある森に向かう。道はゆっくり湾曲して、歩くに従ってつぎつぎ風景が変わる。



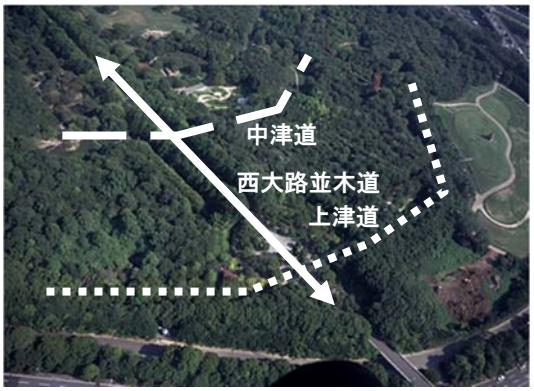
○自然度の高い上津道、大勢の来訪者がゆったりと歩く下津道

一方、丘の最も高いところを通る上津道は鬱蒼とした密生林の中をくねくねと曲がりながら山道の風景を楽しむ事ができる。高いところを通っているために乾燥しやすい地形になっています。そのために尾根筋に当たる上津道には、水路を設けています。上津道に沿って所々に自然度の高い水棲植物が繁茂する沼地や池を設け、野趣に富んだ風景を楽しむ事ができます。一方、下津道は、公園の中心を巡る円弧状の広い道で、そこから放射状に東西大路や幹線道路が、上津道に向かって伸びています。

西大路は、上・中・下の三つの園路と直交して設けました。大路は公園の主要出入り口と園内の施設を結び、公園の顔となるメインストリートとなっています。

左;刈りこまれた巨大な水平に広がる灌木の散開林を通って、密生林へと向かう上津道

左;下津道を、ゆったりと歩く子供たち



○西大路並木道ー自然文化園のメインストリート

東西の大路は公園の顔となるメインストリートです。特に幅２０ｍ、長さ５００ｍの西大路は両側に水路と６列の街路樹を備え、公園唯一のヴィスタを構成し、方向性を示しています。

○緑のトンネルのあるオアシス街道

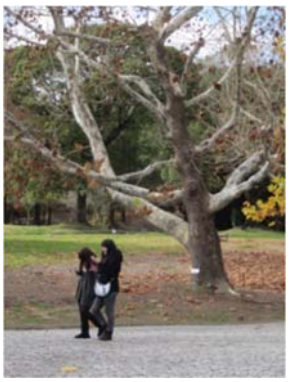
原っぱを突き抜ける一本の並木道。はるか彼方まで見通せます。プラタナスの巨樹が６列に並んで、梢が中央で空を一直線に切り取っています。プラタナスの夏は緑が茂り、冬の葉を落とし、大きな並木道の気分を一変させます。両側に小川を配した並木の風景は、熱い日差しを避けて造られた砂漠のオアシス街道に似ています。落葉のプラタナスが、太陽の光をさえぎり、石畳に大きな影をつくります。

小川の水面に落ちた、プラタナスの葉が、浅い流れにのって、リズミカルに流れていく。オアシス街道の西大路もまた、生命と共に生きている風景をみせています。

西大路の水路からみたビスタの風景。空と石畳と水路がビスタの彼方で一点に交わる

上津道から西大路を見下ろす

上
片側３列のプラタナスの並木からみた西大路。鋭い直線が森と原っぱを横切る



右
剪定された都市の街路樹では見られない、枝を思い切り伸ばしたプラタナスの並木

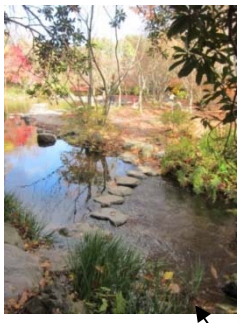
下津道から西大路を見上げる

６列のプラタナス並木と水路と石畳が、ビスタをつくる

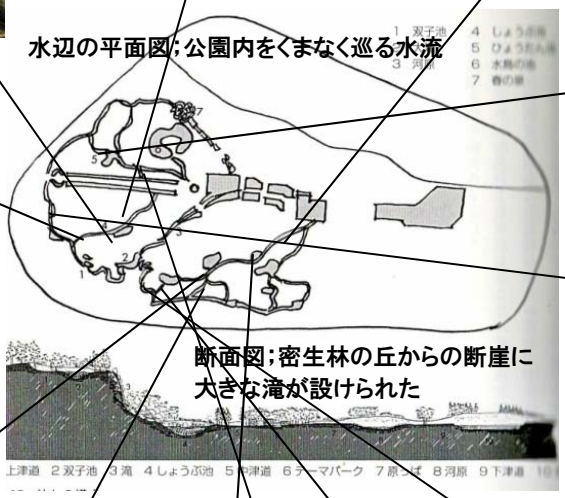
2－11；生物多様性の回遊式風景庭園をつくる水辺のデザイン

○万博記念公園・自然文化園の水辺をめぐる風景デザイン

万博記念公園・自然文化園の最も高い地点に二つの水源地があります。密生林の森に囲まれて双子池から湧き出、流出する豊かな水は、疎生林に入って最初に大きな滝となります。この滝の水は、万博当時の人造の池に流れ込むまでに、様々な経路を辿って分流し、また合流しながら導かれます。公園のどこにいても水の風景が楽しめます。森が水を生み、水が森や生物、生命を育み、そして人々に楽しみや休息を与える風景を創ります。



水辺の平面図；公園内をくまなく巡る水流



断面図；密生林の丘からの断崖に大きな滝が設けられた

表流水系の風景づくりに、4つの分類を設けた
1；連絡水路、2；森林景観水路、3；散開林および広場景観水路、4；池

水流がつくる風景デザインで考慮したのは、1；川幅、流速、水深、水質。2；素材、周辺への景観、しかけ（滝・池・小川・沼等）、水辺線形デザイン等が挙げられます。

2－11－1；滝のある風景デザイン

○密生林の水源から流れ落ちる滝

水流は、丘上の地形の上津道の双子池からながれ落ちる過程で、瀧をつくり、蛇行を繰り返し、途中で沼や池をつくりました。特にあとで述べますが

自然度の高い沼地は、森を再建する上で最も力を入れました。その最大のものが、水鳥の池で、周りを森で囲み野鳥の棲息、渡り鳥の飛来を妨げないように、水辺に来訪者が近づけないようにデザインしました。

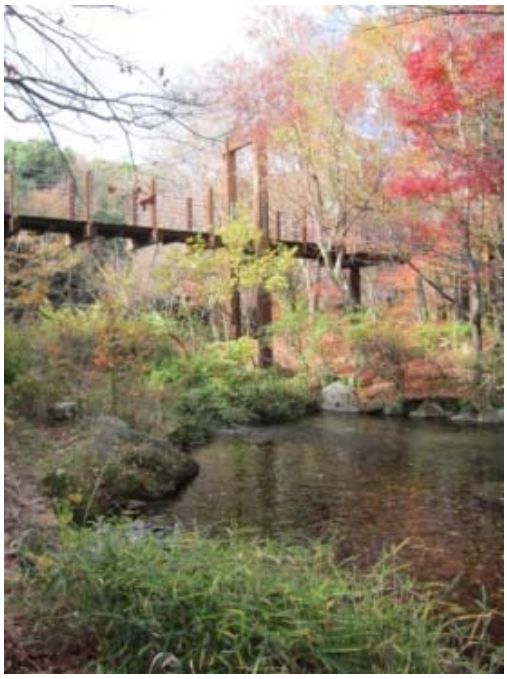
写真は、園内最大の野趣に富んだ人工滝で、紅葉の群落を背景に池に直接に落ち込んでいます。大きな池を前にして堂々たる滝の風情を見せています。滝の真下にまで近づき、水の飛沫を浴びますので、大自然の息吹を体験できます。

水源地の双子池から落ちる瀑布。高さ6mの人工の滝。万博記念公園自然文化園地区を巡る水は、この瀧から始まる

水面に移りこむモミジの紅葉の疎生林の中から落ちる、公園内最大の瀑布

2－11－2;流れの風景デザイン

池に注がれた滝は、自然の渓谷に迷い込んだかと錯覚するほどの大量の水の流れに変貌していきます。渓谷沿いには、細い道と水流をわたる飛び石が設けられています。一方、上津道沿いに小川が流れています。この水流の風景は、すべて人工につくられたものです。生物多様性のある回遊式風景庭園の核になる部分です。



森の回廊・ソラードの木の吊り橋が、峡谷に架かる。

瀧から流れ出る水流は、モミジ川になって、
様々な風景を創り上げる

暗い密生林の小道から、飛び石を伝って渓流
を渡り、散開林に導かれる

密生林の林縁にそって流れる小川。
水面は緩急の流れの変化を見せる

2－11－3;森へと誘う小川の風景デザイン

○原っぱの中を流れる小川

万博記念公園内をくまなく流れる水は、密生林や疎生林から流れ出て、散開林の原っぱを横断して下津道の大きな中央池に注ぎこみます。原っぱのなかにも池は所々に配置されていますが、はらっぱの景観水の風景として、二つの小川をデザインしました。原っぱは何者にも邪魔をされない大きな広がりが風景として
大切です。このはらっぱに一本の細い小川を流しますと、小川は原っぱにいる人にとって、森への誘う道標になります。

小川の中に設けられた四角の立方体の飛び石を伝って、
散開林への導かれる

もう一つの小川は、小川の上を歩けるデザインにしました。立方体の幾何学的な飛び石は、明確に、森への導入、誘いを促す風景をつくります。小川につかず離れずに散策しながら、疎生林の森へと導かれます。
もう一つの小川は、くねくねと曲がり、傾斜を持っています。散開林と疎生林のなかをうねる様にして流れ下ります。水辺は、地形の緩い傾斜になじんで、子供たちは、水辺で安心して夢中で遊べることができます。多くの生きものたちが観察でき、手に触れることができます。

原っぱの中の一条の小川に導かれて、人は散策する
疎生林から流れ下る小川。原っぱから疎生林へ行く曲がりくねった道しるべ

2－11－4；池と原っぱと散開林の風景デザイン

○大きな空と樹木を水面に映す、原っぱの中の池

散開林の風景の特徴は、大地の広がりと大空の間にいることを身をもって体験できることです。大自然の中にいることを実感できます。その中の大きな池の水辺に立って眺める水面に移された散開林の樹木とその上空にひろがる大空は、天地の中にいることをあらためて体験できる場所なのです。

原っぱにある大きい樹林は、散開林の巨樹たちを水面に逆さにまるごと写している。水辺に立つと、大地と天のはざまにいることを実感する

2－11－5;メタセコイヤの林を映す緩やかな曲線の水辺の風景

○メタセコイヤの巨樹を映す水面

子供たちがゆったりと湾曲した水辺に集まります。そっと水辺に手をかざし水の感触を確かめます。水との会話が始まります。その水面に、メタセコイヤの巨木群が逆さに映っています。水辺は水深が浅く、転落防止の柵は、深みの境に設けられ安全が確保されています。

人は水辺に寄り添い、集う。その汀は、柔らかい曲線であってほしい

湾曲する窪んだ汀で、豊かの命に出会う

水面に突き出た汀で、人は水と空の間に浮遊する自己を見いだす

2－11－6；子供たちが夢中になる浅瀬の水場
○原っぱを流れる広河原の浅瀬

散開林のはらっぱを流れる河原の浅瀬の風景。子供たちははだしで浅瀬に入り、貝や小魚を求めて遊びに夢中になります。水深は子どもたちのくるぶしまでの浅瀬として設計しました。

原っぱに巨樹。その影が広い浅瀬に涼風をもたらす。子どもたちは日陰を出て踊る水しぶきの中に足を冷やす

散開林の中を流れる浅瀬。水辺に生育する巨樹が、大きな木陰を提供している

浅瀬の水しぶきが、子どもたちのくるぶしをつつみ、子どもたちは小魚を追う

河原の浅瀬には、大小の石と岩が散在し、緩急の流れをあちこちにつくり、流れの変化を生み出します。広い芝生に囲まれた河原の浅瀬は、芝生での遊びと一体的に捉えます。河原の水辺に生育した巨樹は、河原の浅瀬に日陰をもたらし、休息の場を創ります。

散開林の原っぱと浅瀬。日差しを浴びて、それぞれの遊びに夢中になる

2－11－7;沼のある水辺の風景

○生物の宝庫一沼のある風景

ビオトープという名前もない時代に、最も多様な生物棲息環境を再建するために、「渡りの沼」を、密生林に覆われた上津道に創りました。密生林の中にぽっかりと開けた空地が、「沼」です。日差しが燦々と沼に降り注ぎます。森全体が水面に映り込んでいますから、沼の水辺に立つと、空の中に浮いた森にいるような錯覚に陥ります。水面は波一つなく、静寂とさわやかさが、多様な生物たちと来訪者をつつみこんでいきます。最高のエコロジーの場所が沼地です。

1970年大阪万博当時に、フランスのパビリオンがあった場所に造られた沼地。明るい森を水面に映している

乾燥しやすい尾根に沼地と小川を創った。森の早期育成と多様な生態系を創ることを目指した

1970年大阪万博当時に、アメリカのパビリオンがあった場所に造られた「渡りの沼」。農村風景地区もアメリカのパビリオン。

2－12;原っぱ・草地・サバンナの風景のデザイン

○人類誕生の原風景

散開林が密生林、疎生林と根本的に違っているのは下草である芝生が主体となることです。芝生での人の活動頻度は高く、踏み圧その他の人為的影響が強く現われるため、樹種の適切な保護監理、特に灌水、施肥に注意を払う必要があります。散開林の中の樹木は人々に緑陰を提供することにあり樹形の美しさとヴォリューム感が求められます。広大な芝生の中で孤立して棲息する点で、密生林や疎生林における集団的な樹林景観と異なるからです。樹木は、単木として植栽されますが、池のふち、河原の岸などと周辺の環境とで絵になるような配置が求められます。

万博記念公園自然文化園は、森と原っぱの対比の風景からなっていると言ってもよいでしょう。そのなかで散開林の風景は、広大な平野の草地のイメージです。日本は平野が少なく山に森林があり、平野は早くから都市や農耕地によって改変されてきました。従って、草地で平野の風景は失われ、原風景としても記憶にすら残っていません。この草地の

すすきが繁茂する原っぱ。向こうは密生林

森に囲まれた原っぱは、どこでも気楽な休息場になる

原っぱの巨樹に寄り添う人々のそばを静かに小川が流れる

広い原っぱの風景を、ひとり占めできる

風景も、日本人の遠い祖先が見た原風景です。日本では都市にこのような広い、建築が建っていない空地は殆ど見当たりません。この広大な空地は、都市で緊張感に縛られていた人びとを解放させ、本当のレクリエーションを楽しむ事ができる唯一の風景なのです。

散開林は、人類が二足歩行で誕生した時の原風景であるサバンナだ。サバンナの木陰でライオンが休息するように、人びとは木陰に集まり、会話が弾む

大きな緩やかな傾斜地の原っぱ。子どもたちの甲高い元気な声が、斜面に大きく生育した樹冠の中に、吸収されていく

2－13;ソラード・森の回廊―猿と鳥の目線から風景を楽しむ

○ソラード・森の回廊

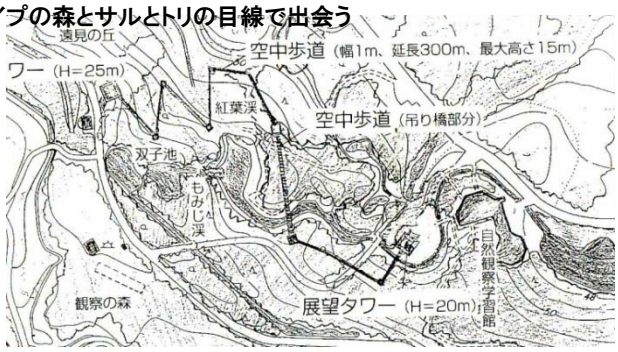
万博３０周年記念事業として、森をサルや鳥の目線から観察できる二つの展望台と「ソラード」と名づけられた長さ３００㍍の「森の回廊」を設計しました。２００１年のことです。さまざまなタイプの樹林をめぐり、地上とは異なる森の姿を体験できます。

展望台の最上階からは、ソラードが森の中を巡る風景が眺められます。手前の濃い緑は密生林の森、その向こうにはひときわ高い落葉樹のカエデとギンドロの群落がみられます。ソラードはこれらの樹林の中を突き抜けていきます。これらの森の向こうに、太陽の塔が南の方を睨んで屹立しています。３０年で、裸地の万博跡地から、ここまで森は熟成（第一次）してきたのです。この森の生育している所が、１９７０年に各国のパビリオンが林立していたとは想像もつきません。

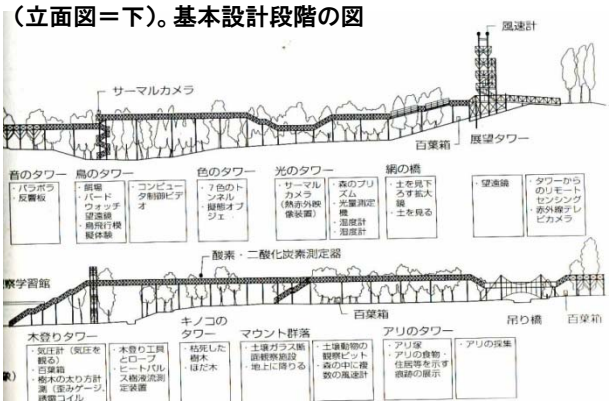
太陽のはるか向こうの東の山並は、生駒山系です。

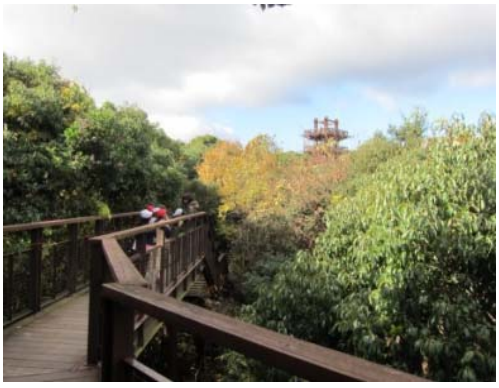
右図は、ソラードの基本計画図です。ソラードの手すりに、森の地上１０㍍前後の気候を測る機器などを設置。

森の回廊・ソラードが密生林・疎生林のぬうように巡る。様々なタイプの森とサルとトリの目線で出会う



森の回廊・ソラードのルート（平面図＝上）と（立面図＝下）。基本設計段階の図





密生林の樹冠を巡る森の回廊・ソラードから、展望タワーを望む

○森の空中回廊のねらい

私たちが森に分け入る時、森への視野は、地上から見上げるしかない。人間は言うまでもなく樹上や梢までゆくことができない。そこではなにがおこっているのか見ることはできない。森を昆虫、サル、鳥などの目線からみることで、森への理解が深まります。また、森を立体的に観察し、森の楽しみを知り、そのなかで森の持つ豊かさ、優しさ、

密生林の中を森の回廊・ソラードはゆく、ギンドロの巨樹群の中ではソラードは樹林の中を潜り見えなくなる。その向こうに太陽の塔がそびえている。

森の回廊・ソラードは、樹林や樹冠を撹乱しないように、細くスリムにデザインされている。サルと鳥のような感覚を得られるように。

偉大さ、懐の深さを体験する。この様な体験を、都市の近くの公園の森に実現することは、都市に森が生育する価値を知る貴重な機会を提供することになると考えたのです。

空から見る森の回廊・ソラード。両端に展望タワーがあり300mの長さのソラードで結ばれている。
様々なタイプの森を突き抜け、渓谷や渓流を渡り、変化に富む樹間の風景をつくる。

森の回廊・ソラードは、密生林と疎生林の中を巡る。

ギンドロの林は、15mの高さの回廊・ソラードを突き抜けて生育している。

2－14;生物多様性のある回遊式風景庭園は、万博の記憶を引き継ぐ風景遺産

○1970年記憶遺産の風景

１９７０年大阪万博のお祭り広場の大屋根を突き切って建てられた太陽の塔は、大屋根が解体された跡に孤立して屹立しています。まわりをメタセコイヤの樹林で囲まれて、公園への来訪者を迎えています。万博当時をしのばせる唯一の遺産でありますが、太陽の塔は新しく生まれた万博記念公園の自然生態系が未来に熟成していくのを見守る新しい母なる役目を担っています。

お祭り広場の大屋根が撤去された跡に、残された太陽の塔。手前は密生林と疎生林に囲まれた梅林

モノレール万博公園駅から望む太陽の塔。密生林の樹群から顔を出している。

数億年前にも生育していたメタセコイヤに囲まれた太陽の塔。悠久の時間が流れる記憶の風景

農村風景区からみた太陽の塔。1970年の万博の記憶が公園に投げかけられる。

3)庭園都市一歩ける街の設計

〇前言住宅団地のオープンスペースは、回遊式日本庭園や鎮守の森の参道のように歩いて楽しむ空間を確保することが基本です。自動車に邪魔されず買い物、通学、通勤、遊びなどのオープンスペースでの移動や交流が確保されることが「人間の街」の条件で、その場に四季折々の自然を楽しめる風景が息づいているのが、目指すべき「庭園都市」です

3－1；水と緑のインフラストラクチュアー南港ポートタウン

〇南港ポートタウン

南港ポートタウンと次に述べる芦屋浜ニュータウンは、ともに大阪湾に面した臨海部の海岸の埋め立て地に建設されたニュータウンです。地形は全く平坦で、形状も矩形をした人工地盤です。この無機的な土地にアメニティ豊かな緑の環境を備えたニュータウンを作ろうと意図したのが両者に共通して設けられた「緑道と公園」です。南港ポートタウンでの「川のある緑道」と芦屋浜シーサイドタウンの緑道ー公園です。両者ともにニュータウンを貫いて設けられた幅が１０～３０ｍ、長さ１～２ｋｍという緑陰をもった歩行者と自転車の専用道路の存在であり、この道がニュータウンの空間と機能の骨格になっていることです。このことを可能にしたのが完全な歩車分離によるもので、この幹線園路に沿って歩けば、通勤、通学、買い物ができます。街の緑のインフラストラクチュアと呼んでいます。

南港ポートアイランドの全体平面図。住棟群の真ん中を水と緑の緑道グリーンベルトが貫通している。
。

大阪湾を背景に立地する南港ポートタウンの中層住棟群。その間に濃い緑の水と緑のグリーンベルトが貫通する

濃い緑の水と緑のグリーンベルト

濃い緑の水と緑のグリーンベルトを構成する緑陰街路

グリーンベルトを流れる小川
休日は、東屋で家族がバーベキュウーをしている姿が見られる

南港ポートタウンは、港湾機能とともに約２０００人の集合住宅地規模で建設されました。南港ポートタウンの緑の帯である「川のある緑道」は、この住宅を貫いて中央に設けられました。人工の小川が歩行者専用の道に沿って走る「川のある緑道」は、幅３０ｍ、長さ２ｋｍの緑の帯で、川と道と樹林が緩やかに互いに耕作しあって、多彩な水辺の風景を作りあげています。随所に設けられた東屋とともに、風景の移り変わりをゆっくりと楽しめる日本庭園の雰囲気を持って構成されています。

水辺は浅く、子供たちもその中に入って水と遊ぶことができます。両側の樹林帯は既に鬱蒼と茂り、空を覆うほどになっています。水辺プロムナードを歩くと、まわりの中層の集合住宅の建築群も目に入らず、大きな自然地の中に散策しているような錯覚を日常生活の中で楽しめます。

一方、駅の近くでは、大きな芝生地のオープンランドがあり、ここでは太陽の光を浴びてスポーツや芝生に寝転んだりした休息が得られます。樹林のない芝生地や方形の池からは、住宅団地の中層の風景が樹林や森の向こうに遠望でき、ここでは中層建築群を借景とした広場と公園の風景が生まれてくるのです。閉ざされた緑の風景、開かれた緑の風景が、街区の中央を突き抜けています。

グリーンベルトは、二つに分かれていて、日本庭園的な、風景で構成されている

水路の幅に広狭の変化、水面と岸の連続性、遠近の対比によって、絵になるような風景を目指した。

公共の住宅団地の緑陰の風景に、伝統的な日本庭園の「見え隠れ」などの構成技法を取り入れている。

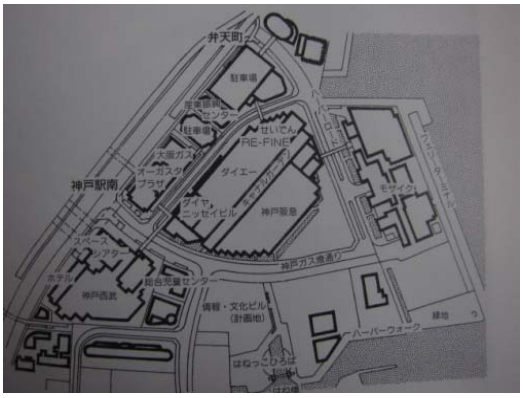
下左）濃いグリーンベルト。森に囲まれて水面（写真左下）がある。大阪湾のすぐ近くに、豊かな自然地が息づいている。その水面は上右の池

住宅団地のなかのひろい原っぱの風景。のびのびとした解放感をもたらしている。

左）住宅団地のなかの森を背景にした矩形の水面。原っぱの広がりとは対照的に、落ち着きと静けさをもたらす。

3－2;港街をめぐる修景運河ーハーバーランド・モザイク

ＪＲ神戸駅の海側に「海に繋がる文化都心」をキャッチフレーズに、百貨店、オフィス、専門店、アスレチック、クリニックが集結する大規模なウオーターフロン再開発事業が、神戸ハーバーランドです。ここはさらに神戸市が目指す「アーバンリゾート都心」を目指しており、その目玉として国際貿易港の玄関としてもエキゾチックな雰囲気のレストランや土産物の街区が併設されています。従来は三菱倉庫を始めとして古くからの港湾施設があり、一般の人が近づけなかったのですが、新しい都市開発を「海水を取り入れた修景運河」をめぐらせることで実現しました。修景運河は、実際に船が走り船を停泊させることはできない見るだけの運河です。水運の街のイメージを伝承し、新しく運河のある街のイメージを大切にして、新しい海辺の街を再現したのです。



モザイクの平面図。神戸の港に面した大規模商業地区。海と旧市街地を結んで、縦横に修景運河が設けられた。

モザイク・大規模商業地区の入り口

神戸の港が一望できるモザイクの2階レストラン前のデッキ

大型ショッピングモールの中の
修景運河の両脇の休息施設群

海岸線から離れた大型ショッピングモールの中にも、修景運河が設けられ、レストランが面している

修景運河は、水運の機能を持たない水路と建築と散策道との新しい街の美学を追求したものです。新しい都心を構成する様々な建築群や、リゾートという都市にいながらにして非日常的な気分を味わうことができる風景に不可欠なものが、街を貫く「海水を取り入れた修景の運河」です。この新しい水辺が訪れる人をゆったりとした時間へ誘い、さらにビジネスチャンスへと結びつけます。既に竹中工務店の設計部によって全体の土地利用や水路が決定されところで、修景運河のデザインを依頼されました。ランドスケープデザインに求められた課題は、修景運河のゆったりとしたボリューム感を建築と街区をつないで、如何に演出するかでした。通常の内陸部の再開発の商業施設は幅の広い水路を設けると言う土地利用上の余裕は殆どないのですが、ここでは、運河というイメージを維持する最大限の幅の確保について、相当活発な議論が交わされました。その成果が、写真の修景運河の風景を創っています。

開発以前は、港の倉庫街と運河があった。その原風景を、船が通らないが、修景運河として復活させた。

修景運河の岸辺に佇むと、意外と水面に広がりを感じることができる。船が通らないがわざと水面から持ち上げたり、建物を低くしていることが効果を奏している。

運河は、直線でメカニックで人工的な風景になりがちだが、運河にそって緑陰の小道や広場、橋を設けることで、ヒューマンスケールの水と緑の風景を生み出している。

修景運河の両側の対象的な二つの散策路。修景運河を挟んで、緑の風景と街の風景を選択して、散策を楽しめる。

修景運河の端上やテーブルの椅子席から、高層ビル群の都心の風景が、修景運河の先に望むことができる。

3－3;歩車分離の街
―芦屋浜シーサイドタウン
○芦屋浜シーサイドタウン

南港ポートタウンと共に完全な歩車分離の思想が貫かれているのが芦屋浜シーサイドタウンです。歩車分離の大規模公園では今から１００年前のアメリカのセントラルパークで、自動車は公園の地下トンネルを通り、公園は歩行空間です。立体交差によって歩行者だけに空間を創りました。同じ時期のイギリスでの田園都市でも歩行者専用の道が創られました。最も徹底した街は、自動車王国のアメリカ合衆国のニュージャージー州のラドバーンで今から１００年ほど前に創られ、歩行者と自動車は立体的に分離され、歩行者専用道路ができたのです。芦屋浜シーサイドタウンは、同じく立体交差によって延長２ｋｍの歩行者専用道路を実現しました。

芦屋浜シーサイドタウンは、海浜の埋め立て地に建設されたニュータウン。東西2kmの細長い街区に、15000人が居住し、完全に歩車分離を実現していることが特徴。

歩車分離が徹底している。自動車道の上に歩行者専用道路がある

歩行者専用道路が、自動車道の上を通っているために、両者をつなぐ役割を、公園が担っている。歩行者は、公園を通って、歩行者専用道路と自動車道に行ける。

自動車道にも、歩道があり、自動車利用者はこの歩道をから、歩行者専用道路にアプローチできる。

手前は街区公園で、その向こう上部に歩行者専用道路が見える。街区公園のレベルは、幹線道路と同じで、その歩道と公園が繋がっている。

戸建て住宅街では自動車幹線道路沿いに、幅の広い植え込みと街路樹が設けられ、歩行者を自動車の走行から視覚的にも分離している。

海岸の造成地に南北に貫通して設けられた中央緑道は、大阪湾に注ぐ河川を橋でまたいで、東西に１ｋｍずつ伸びています。中央緑道の河川沿いの中央部にショッピングセンターやオフィス、行政の支所、郵便局があり、そこがバス停留所でもあります。中央に施設群は地上から立体的のビルになっていて、二階レベルで中央緑道と繋がっています。
一階レベルは自動車道、２階レベルが歩行者専用道路で、この道に沿って、幼稚園、小学校、街区公園、近隣公園があります。そのために日常のほとんどは歩いて移動でき、自動車の走行の姿を見ずに散策が楽しめます。
特に、公園は一階の自動車のレベルの幹線道路と中央緑道の交差部分に設けられているために、平坦な造成地にもかかわらず、街区公園内に傾斜地が生まれ、自然の地形に近い風景が街区公園の周りと中央緑道沿いにつくりことができ、緑豊かな歩いて楽しめる街をつくることができたのです。

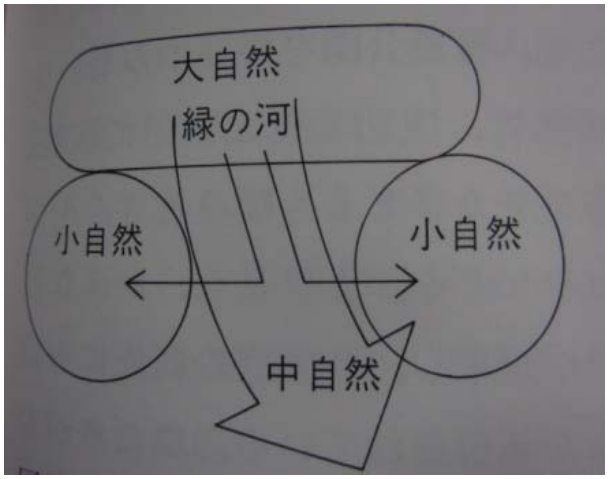
集合住宅群の中を貫通する歩行者専用道路。右手は小学校の校門。

日本庭園の伝統的手法を公共の近隣公園に生かしたという機会が、松林の風景で有名な芦屋の海岸の街で実現しました。単に見るだけの日本庭園ではなく、歩きまわれ、芝生の中では走り回り、グランドゴルフができ、池の中に入り水遊びができる日本庭園です。
日本庭園の高度な風景づくりを公共の公園に生かす。大きな風景のなかに、日本庭園独特の細やかな風景が息づいている公園の実現を目指したものです。

右；近隣公園として開放された日本庭園の風景

3－4;中自然都市
　一桂坂ニュータウン
○桂坂ニュータウン

一旦造成され、破壊された山地に建設されたニュータウン。自然を徹底して再建することを目標に実現しました。2003 年のことです。最初は大規模な土木造成でしたが、古都京都近郊の山地破壊を目にした事業主の故堤会長は、すぐさま工事を延期してでも徹底して自然を再建する案を樹立することを部下に命じました。「こんな無茶な造成はだめ！もう一回プランを書き直せ」ということで、私たちがランドスケープデザインとして採用され、徹底して自然をここで再構築しようと、そこで「中自然」という自然再生のキーワードを持ち出したのです。



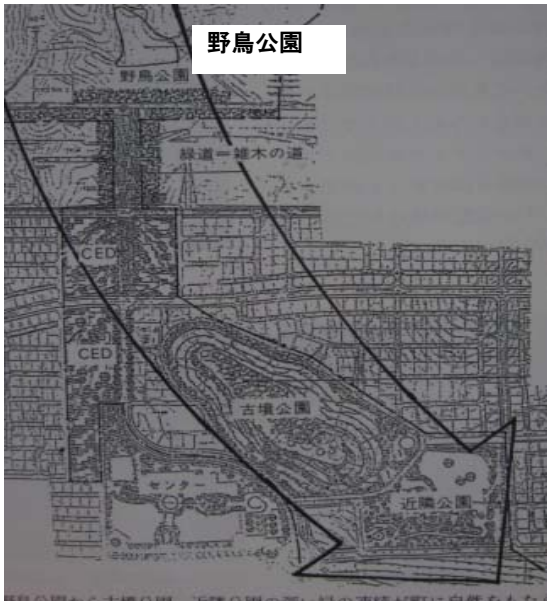
桂坂ニュータウン開発のコンセプトは、山地造成による開発で失われた自然の大規模な再建である。その骨格は、中自然としての自然再建である。

緑道の奥に見えるのが野鳥公園のゲート。その奥に大自然の山塊が見える

山腹を切り開いて造成された桂坂ニュータウンは、山頂から中腹までの山塊を大自然と位置づけ、山腹のいくつかの谷川が集まった所に、野鳥公園を設けた（大自然＝右上）。野鳥公園から野鳥が造成された街に、飛来する中自然ルートとして、街の中にいくつもの緑道を創る（中自然）。その中自然は各住宅の庭（小自然）と繋がり、大、中、小の自然の広域のネットワークによって、自然が回復することを目指している。

中自然の緑道。樹木で覆われ緑のトンネルになっている（上と右）

造成された敷地の緑を再建するに際して、この庭園都市になるべき要件をあげ、個人の住宅から公園まで、そこで生活する様々なライフスタイルとともに人々の生活の舞台になり、ともに育ってゆく生物的自然を主眼にして構成することにしました。そこでは緑の河、野鳥公園、ヘッジロー緑道など様々なシーンが、この街を庭園都市にする工夫をし、実現するようにしました。



野鳥公園の大自然から、桂坂ニュータウンへ流れ込む中自然の流れの模式図。住宅地の塊の緑や古墳公園の緑と繋がっていく。

中自然の中核の緑ー古墳公園地区の原っぱ・草地・大自然から野鳥、哺乳類、昆虫が訪れる。

二つの異なる滑り台のある公園の風景。地形の起伏に沿わしたもの、樹冠の中から滑り下りるもの。中自然の中の遊具

中自然の中核の緑ー古墳公園地区の原っぱ・草地・大自然から野鳥、哺乳類、昆虫が訪れる。

歩行者専用道路と街区公園が柵なしでつながっている

おしゃれな街区公園。

緑の河ーーこれは西京桂坂ニュータウンの環境計画において最も重要な概念でした。ニュータウンは山麓の山裾を開発対象にしましたが、幸いにして背景に山地が残され、造成によって失われた平地の森の再建を、この背景の山地の緑の持つ生態系を活用することによって、豊かにかつ早急に緑の回復を達成させることが重要な課題になりました。

もう一つは徹底的な歩車分離の思想です。平面において如何に歩行者専用道路を確保するかが課題でした。ラドバーンのように歩行者空間を囲い込むのではなく。自動車道と歩行者道の分離を平面で実現したことです。（右上図）

街区の中に、歩行者専用道路を設けるために、自動車は、歩行者専用道路を横切らないで、Uターンをする構造になっている。このことによって、歩行者専用道路は、大自然の山塊から、街区の中自然に、自動車の走行を見ずにゆったりと散策が楽しめる構造になっている。

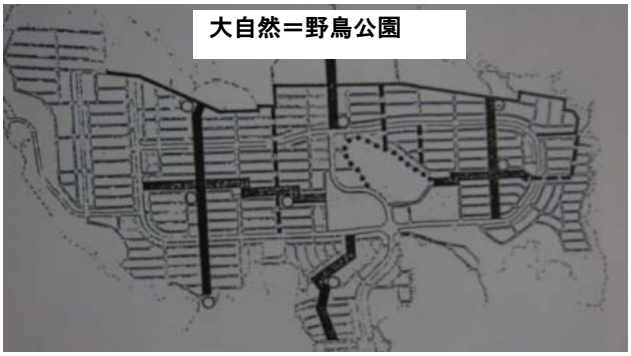
歩行者専用道路に並行して自動車が走る（左に自動車が見える）自動車道は歩行者専用道路を横切らない、

日本でいち早く1990年代に取り入れられた「交通静穏化街路」。自動車の騒音に煩わされることなく、静寂な環境を住宅街で如何に維持していくか。その方策が、ハンプと狭さくと曲線の道路形態である。
ハンプはわざと道路の一部に盛り上がりを創り、自動車のスピードを遅くする。狭さくは、道路幅をわざと狭める障害の個所をつくり、見通しを悪くする。曲線道路も同じである。狭さくには植樹をし、緑を増やす効果がある。

歩行者専用道路は、ニュータウンの幹線道路に繋がっている。幹線道路沿いに学校、ショッピングセンター、バス停留所、広狭施設があり、幹線道路沿いの歩道を介して、全ての施設に安心して歩ける街になっている。

右が歩行者専用道路、左が自動車道。

右図にある南北の縦ての黒い実線が歩行者専用道路です。この道は緑道でもありますが、その最も重要なことは、背景の山の生態系とりわけ山麓に設けられた野鳥公園と、ニュータウンの街と繋がっていることです。野生の生物がこの緑陰を通って飛来し訪れるルートです。このルートが中自然の道で、この道はスポットの公園と繋がり、住宅地にも接していて、街全体が中自然都市として息づいていくことになります。



桂坂ニュータウン内の歩行者専用道路＝緑のネットワーク。緑道は全て大自然の山塊と野鳥公園に繋がっている。

歩行者専用道路＝路面のデザインは、歩く速度で移動する子供たちに、ある種の動的なリズムを生み出す。

桂坂ニュータウン内の幹線道路に直交する歩行者専用道路＝緑道。路面のデザイン化された舗装が、歩ける街路であることを示唆している。

歩行者専用道路＝緑道と自動車道路の明確な区別を路面によって行う。

歩行者専用道路＝緑道の路面のデザイン。桂坂ニュータウンは、歩いて楽しい街を目指している。快適で楽しく、わくわくする歩行空間への意欲的なデザイン。

4)新梅田シテイの公開空地
――空地は、どうして生みだされたか――

4－1；造園家の仕事は、「空地」を生みだすこと
○事業主・建築家・造園家の初期の決断

地価の高い都心の再開発事業で、土地の経済的価値を最大限有効活用することを目指して、敷地いっぱいに高層ビルを建てようとします。こうして、都心の空は高層ビルで覆われ、地表は日照と緑が乏しく、災害時の避難場所もない危険な場所となってしまいます。このような都心・市街地の建築物群の過密を解消し、緑と散策空間を増やそうと、企業の再開発事業に眼を付けて、企業の土地に公開空地を設ける制度を創りました。

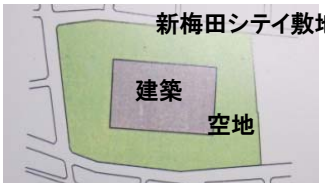
企業の所有地の再開発敷地の一部を２４時間自由に市民が出入りでき、散策や休息ができる緑のある場所を提供する替わりに、再開発建築物の容積率と高度制限を緩和し、ボーナスを企業に与えようとする設計制度です。大阪市北区ＪＲ梅田駅北の位置する新梅田シティは、上記の空地を生みだす事業にそって建設されました。敷地は約４㌶の規模です。わたしは、この再開発事業の地表すなわち公開空地の設計を担当しました。１９９０年のことです。昨年（２０１３年)、２０周年記念事業が行われました。この２０世紀末の大阪における超高層建築の先駆けであり、独特な建築で有名になった新梅田シティですが、実は空地を生みだすという点において、新しい視点を取り入れています。造園設計は与えられた敷地に建築家が先に建築の場所を決め、残りの余白にしか造園家は造園のデザインを許されず、結果的には、造園空間はほんの付け足しか、緑のアリバイづくりに終始し、都心に良好な緑が少ないということになります。

新梅田シティでは、四つの事業主、建築家そして造園家の私が、一体となって共同して「緑の塊」である「空地」をどう地表に生みだすかという課題に取り組みました。

第一は、四つの事業主（積水ハウス、ダイハツ、東芝、青木建設）が、隣接するそれぞれの敷地をもちより、一体的に市民が使える緑の塊である空地を生みだそうと努力したこと。

第二は、建築家と造園家のコラボレーションを、敷地にどう建築物を配置するかの段階で空地を生み出す作業に取り掛かったことです。空地を生みだすためには、造園家は敷地が白地のキャンバスの段階で関わる必要があるのです。

新梅田シテイ敷地
敷地における建築と空地の関係



上図；敷地の中央に建築を建てると、周りにしか緑は取れない。下図；建物を街路にぎりぎりに建て、中庭をつくる。両方とも、コミュニティの緑になれない

一つの街区に4つの企業が別々に緑を設けても、緑はバラバラで孤立し大きな塊にならない

建築群を敷地の4隅に配置すると、中央に緑の軸が生まれる

最終的には、方形の敷地の中央空地をつくり、新梅田シテイの地表部での都市の骨格・空地軸とした（上・下図）

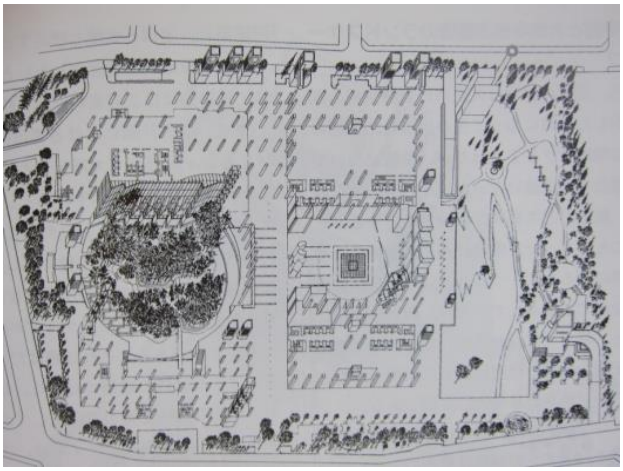
○事業主・建築家・造園家の初期の決断

空地をうみだす二つの大きな流れによって、新梅田シティは、建築家原広司氏の当選案を軸に、空地をどのような内容でどのような形状で確保するのかという具体的な作業の段階に入ることになりました。作業のプロセスについては、後ほど触れていきますが、結果的には、空地を新梅田シティの都市としての整合性に即して、グリッド・格子状に構成し、新梅田シティを取り巻く街区と連続性を持たし、敷地を外部に開かれた都市の一角に位置するようにしました。このことによって、空地は新梅田シティで働き、来訪する人にだけではなく、広く市民に開放された公共空地としての機能を持つことに成功したのです。

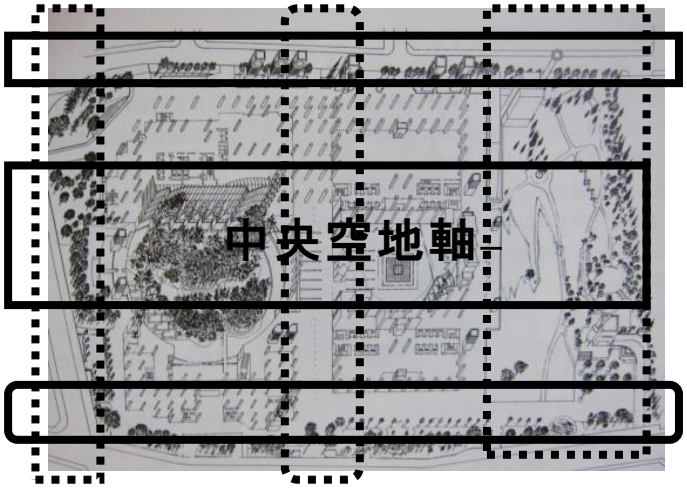
特に南北に長い矩形状の敷地の中央に設けた「中央空地軸」は、凱旋門状の二棟の連結超高層がその上をまたぐような形状となり、シンボル性の高い都市軸となっています。

このシンボル軸は、新梅田シティの文化の軸でもあり、顔でもあります。この軸線に沿って、イベントや集会、交流会がおこなわれ、中自然の森や花野里山では、散策、休息、自然観察等都市にいながらにして多様な自然と接触できるのです。

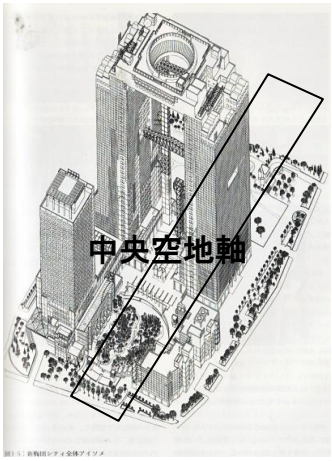
この公共の空地は、二棟の超高層建築の容積率を上げ、建築の高さをさらに高くする代償によって生まれたものであり、新梅田シティは、他の再開発事業では見られない、敷地に対する空地率６０％を達成しました。これによって、２４時間誰でもいつでも散策し休息ができる豊かな自然が繁茂する公共空地が生まれたのです。そのプロセスを、次に述べてゆきます。

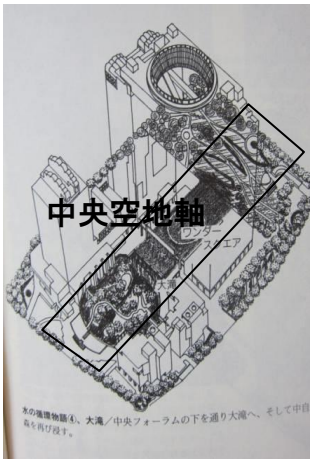


最終案の建築群と空地の配置状況



空地はグリッド（格子）構造として、敷地に設定された。このことによって、中央軸はコミュニティの骨格軸、南北の東西の道は周辺地域に解放された空地軸となる





参考・引用書；「空中庭園＝連結超高層建築１９９３ー新梅田シテイの記録」宵国社
「森が都市を変える」吉村元男・学芸出版社

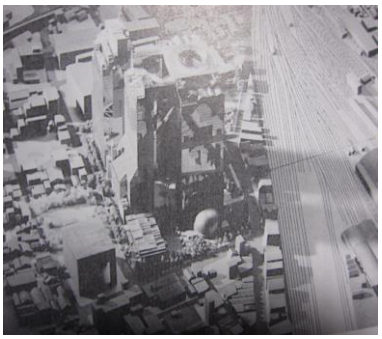
4－2；建築家と造園家のコラボレーション

○事業主・建築家・造園家の決断

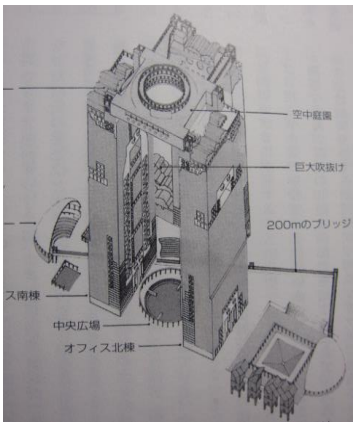
空地を生みだす二つの大きな流れによって、コンペで当選した原広司氏の当選案を、都市としての整合性すなわち都市であることの理念をどう敷地に反映させるかということから、新梅田シティの設計作業が始りました。当選案には、コンペの募集条件として、「空地を生みだす」という都市思想を前提とすることがうたわれていなかったからです。４つの事業主が目指したのは、共同して事業を推進することで、相当量の緑地特に公共空地をうみだすことでしたから、この作業が建築家と造園家そして企業から派遣された事業スタッフが造る協議会の最初の仕事でした。コンペ事業が始まる前には、事業スタッフは海外の超高層建築の再開発事業を視察し、今日の都市再開発の最も重要なテーマは、都市に良好な環境を創出することだと確信したのです。その考えのもとに、敷地にどのようなイメージを植え付けるべきかについて、コンペ事業の前に、私の事務所を訪れ、環境を主体にした新梅田シティの構想を描くように依頼してきたのです。この時にスタッフが手にしていたのが、拙書「都市は野生でよみがえる」でした。単なる緑ではなく、野生と神話生をもった緑を、新梅田シティの都市形成の理念の中核にしたいということでした。造園家が、建築家の前に、敷地の相談の依頼を受けるのは、異例のことでした。それだけ、事業主の環境への想いが強かったのです。

新梅田シティ開発協議会のメンバーが、参考にした拙書。

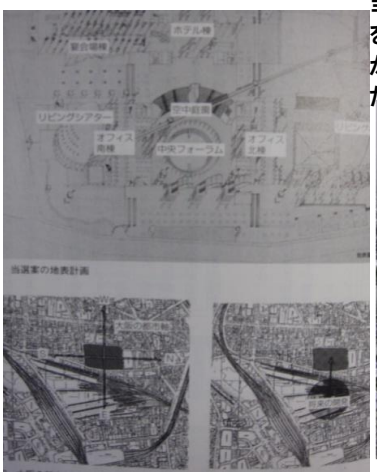
新梅田シティ開発協議会での建築家原広司氏（右）と吉村元男（左）。後方に協議会のメンバー。ディレクターズユニオンの構成メンバー



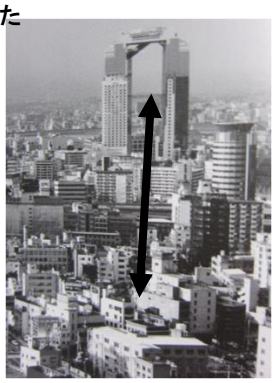
コンペで当選した原氏の当初の案。東のＲ貨物ヤードに向いていた



当選案の連結超構想建築。２棟を結ぶ上空に空中庭園がある。しかし地上には緑がほとんどなかった



上）当選案の地表計画
地表はほとんど人工施設で埋められていた。
下）当選案は、将来開発予定と見なしてJR北ヤードを意識して東西軸となっていた。しかし、大阪の都市の道路の文脈は南北軸であり、協議会での議論で南北軸に建築配置を変更した。



完成後、大阪市の南からみた新梅田シティの景観。
南北軸によって、凱旋門のようになっている。

○空中都市という概念

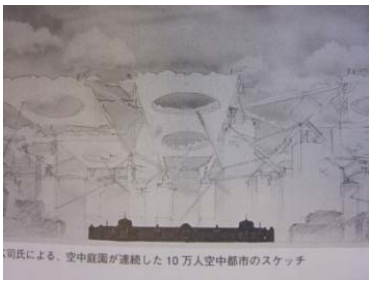
建築家原広氏の当選案は、誰もが驚く案でした。三つの超高層の棟の頂部で結合し、結合部分は円形の穴があいていて、それに空中庭園という名称が与えられていました。いままでだれも見なかった超高層建築群です。これには三つの課題が浮かび上がりました。

１；地表にほとんど緑がないこと。２；超高層建築群が、将来開発されると想定したＪＲの操車場に向いていること

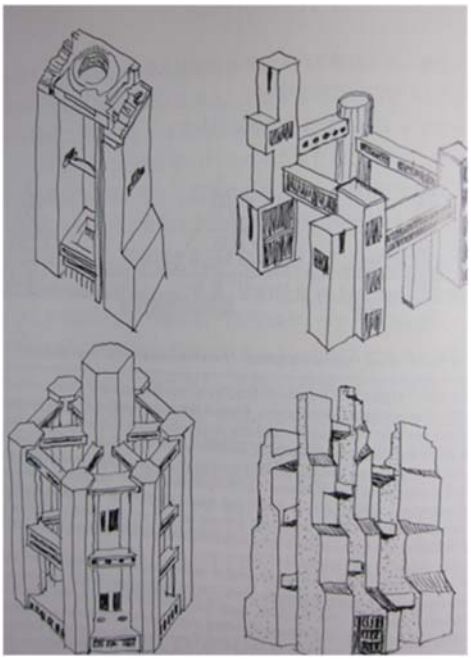
３；空中庭園というコンセプトをどう都市に活かすか

でした。第一は私にとって最も不満であり、何よりも地表の相当部分が人工的な施設で覆われていることでした。公開空地を生みだし、そこを２４時間市民が散策し休息し、楽しい交流の広場にする必要があったのです。第二は当時まだ供用されていたＪＲ操車場がいつ開発されるのかの確実な時期が判らないままにこの方向に建物の配置を決定することの疑義があったこと。そして何よりも、新梅田シティに作られる空地は、大阪の都市の空地の文脈に合わせるべきだという私の意見によって、建築配置は、東西から南北に変えられたのです。第三は超高層建築群に都市という文脈をどう作り上げていくのかという課題です。原氏の空中庭園は、未来の都市は空中都市になるという新しい都市思想に裏打ちされたものです。それが、連結超高層建築の発想だったのです。

20世紀中葉に流行った超高層建築（ミース・ファンデル・ローエ）。上から下までガラスで覆われ無表情な建築。



原氏は超高層建築群は、空中都市に成るべきだと考えていた。
原氏による空中都市のスケッチ。超高層建築の頂部で空中庭園が連続している。



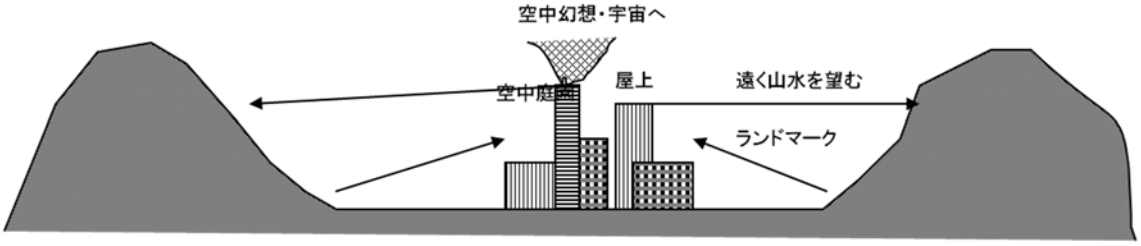
新梅田シティのスカイビルの構造設計を担当した木村俊彦氏は、超高層建築を上部で繋ぐ連結超高層建築群の構想を技術面で支持した。

原氏の空中庭園を、木村氏は連結超高層で構造的な理論的根拠を与えた。2棟をビルの頂部で連結することは、揺れ動いている電車のなかで、二人が手を繋いだ方が安定して立っていられるという論拠。また、一方のビルで火災が起っても、その上部階の人びとは、空中庭園を通って他のビルに避難ができて安全である。

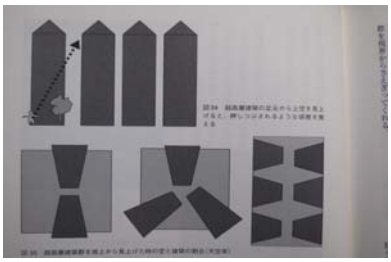
○空中庭園について

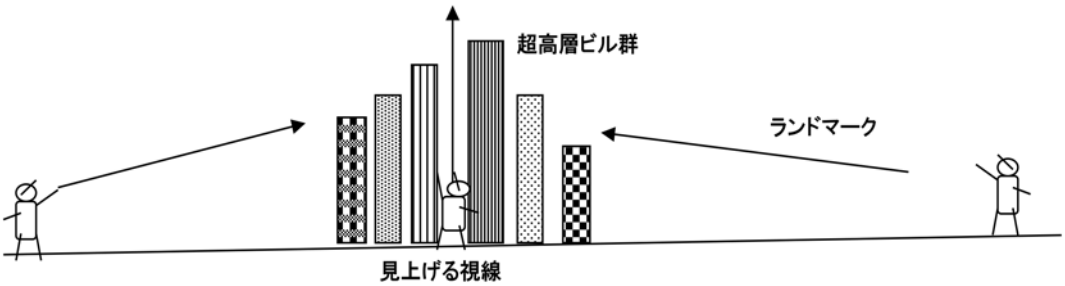
原氏は、超高層時代は地表から離れて空中に居住する時代の到来を前提とし、空中に住まうという人類の新たなる居住形式として、１０万人規模の空中都市を提言しました。その象徴が「空中庭園」で、地表が大地の生物生命と生活する場に対して、空中は宇宙と呼応する新たなる楽園と位置づけ、その具体的空間としたのが空中庭園です。したがって其処には草木花昆虫はいなくてもよいのです。このような原氏の空中庭園、空中都市に対して、造園空間である地表をどう設計すればよいのかが私への課題になりました。このままでは、新梅田シティは、地表と空中との二重の層があるというだけの都市になりかねません。そこで、空中庭園を実際の地表の植物が繁茂する庭園と関連する「垂直の庭園」或いは「地表から宇宙を見る庭園」という構想を考えついたのです。それが「中自然の森＝地球の庭」から「空中庭園」を望み、その先に宇宙が広がる「垂直（宇宙）軸」です（次ページ）。

原氏は空中庭園を、宇宙を夢見る展望台とした。しかし空中庭園にはバビロンの空中庭園にあった草木や花など、楽園をイメージする物は何もない。空中庭園の展望台からは、大阪湾、北摂、生駒の山並みが遥か彼方に遠望できる。原氏の空中庭園は、遠望できる海や山並み、眼下の町の風景をわがものにできる展望施設である。



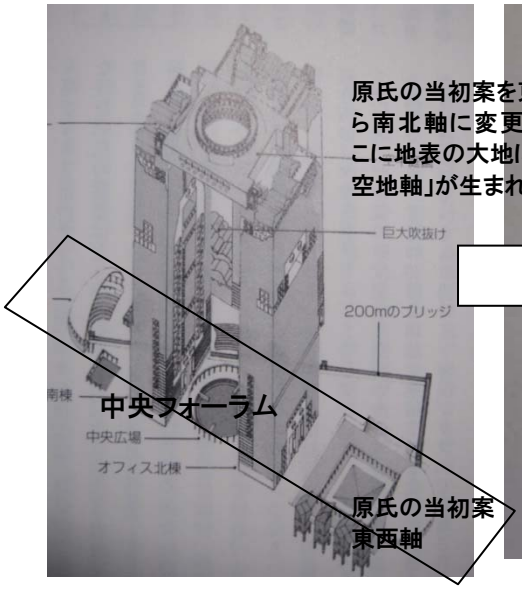
円環構造をもち、中に穴のあいた空中庭園を見て、私は、地上から宇宙を眺望する望遠鏡のレンズの役割を果たしていると、直観的に思った。
地上から超高層建築群を見上げるとき、人びとは峡谷の谷間の底にいるような錯覚に陥る。空はビルで覆われ、切断されている。空がどれだけ見えるかという指標に、天空率がある。
超高層の大規模建築は、それらが密集すると地表の空地を消滅させるが、空の空地をも消滅させる。



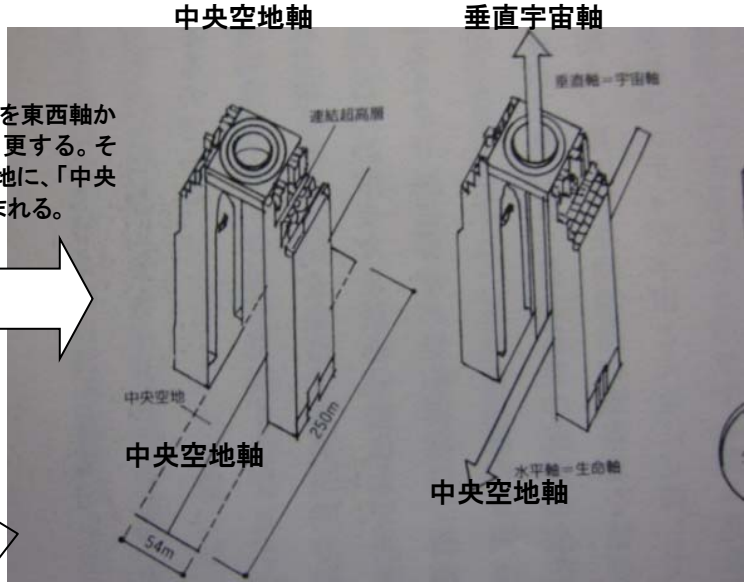


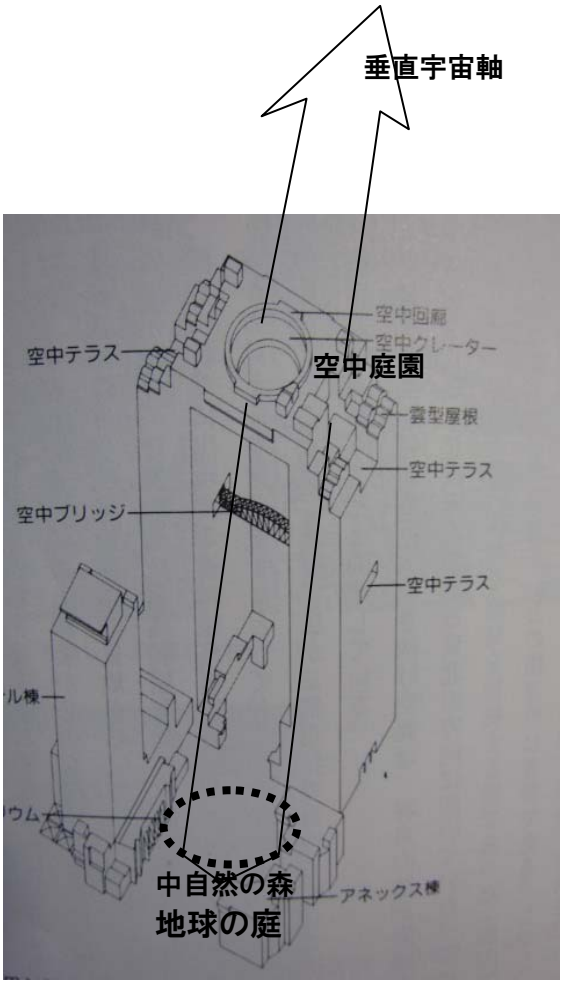
公開空地に二つの軸が生まれた

中央空地軸　　垂直宇宙軸



原氏の当初案を東西軸から南北軸に変更する。そこに地表の大地に、「中央空地軸」が生まれる。





地表（大地）に、中自然の森（地球を想定）を設けて、中自然からの見上げる視線上に、空中庭園の穴があり、その穴を通して「宇宙・空」を見る。これは地上の中央軸（水平軸）に対して「宇宙軸（垂直軸）である。中自然の森の梢を通して空中庭園を見ると、あたかも空中に浮いているように見える。
空中に草木花がなくても、中自然の森・地球の庭から滝や木の梢を通してみると、空中庭園が、中自然の森に浮かんでいるように地表から見える。

空中庭園を中自然の森・地球の庭から見上げる視線

空中庭園を地上から見上げる視線

公共空地ー二つの軸と二つの水の誕生と二つの滝

新梅田シティに中央空地と垂直宇宙の二つの軸が、南北に長い敷地にふさわしい都市の骨格が立体的にできたことを意味しています。この骨格に、生命の息吹を与え、この超高層建築群が、自然の大きな秩序と規範にそった新都市として生まれ変わる条件ができたのです。この生命の息吹は、新梅田シティの中央空地軸に誕生した二つの水の誕生です。
垂直空地軸では、天空から空中庭園を背景に水が誕生します。もう一つは、地上部において、中央空地軸の最も北に位置する部分からもう一つの水が「湧水」として誕生します。
この二つの水の誕生は、中央空地軸にそって、垂直宇宙軸では列柱滝となって中自然の森に注ぎます。地表の中央軸では、花の里山の湧水が花の里山を潤し、中央広場であるワンダースクエアの下を通り（イメージ）これも中自然の森に注ぎます（布滝）。二つの滝は、中自然の森とそこに棲息する多くの生物生命を育み、人々はその森で散策、休息します。

滝の裏から滝を見ている

中自然の森に注ぐ二つの瀧。上；宇宙垂直軸からの列柱滝。宇宙から降り注ぐ滝。
高さ17mで9本のステンレス製の柱から噴出する。下；中央空地軸からの布滝。地表を流れた水流が、中自然の森に注ぐ。幅40m、高さ3mに布状に落ちる滝

4－3;環境創造都市―良好な環境を生みだすためには、建築家は譲歩しなければならない

○建築家は、敷地の真ん中に建築を建ててはならない

大阪市への空地設計の報告書のなかで、新梅田シティに設けられるべき空地について「空地が文化性を獲得する三つの段階」として次のように記述されています。

本開発計画は、その規模あるいは計画地の都市計画上に占める位置などからみて、社会に寄与するに足る条件を満たすこと。社会性を獲得してゆくための条件は、他の条件に先行して検討されること。その客観的な評価尺度として「公開空地」が考えられる。「空地」が有益である意味は三つの段階があると考えられる。

１）空地が人々の都市生活の安全性に寄与していること。

２）空地が、公共的空間の効率性を高めることに寄与していること。

３）空地が、都市景観の形成・地域とのアイデンティティある町づくりなどといった都市の文化性あるいは意味性に寄与していること。これは公開空地が満たすべき条件の順序でもある。

以上の敷地における空地に関する理念は、「空地を生みだすために建築がある」という視点です。ヨーロッパの都市には広場があります。広場は建築に囲まれて創り上げられたのです。その場合、建築は広場を創るために、譲歩しなければなりません。同じように新梅田シティでは、良好な社会的に意味のある環境のために、建築は場所を空地に譲らねばなりません。環境を生みだす都市、それが「環境創造都市」と称する新梅田シティの理念です。

新梅田シテイでは、公開空地を60％以上確保できたために、都心であっても、これだけの緑が繁茂することになった。

地表のデザインーおもしろい中央空地軸

ビオトープの池に架かる木橋

花野里山の森の中の小道

湧水から花野里山へ湧水が小川となって流れ出す

花野里山から流れ出た水が水面をつくり、グランフロン大阪を水面に映す（左）

花野里山を巡る小川（右）
花野里山から扇状地にでた屈曲する小川と池（下）

湧水から花野里山へ流れるでる小川（上）と周りの樹林（下）

水源の花野里山を流れる水流はワンダースクエアへと向かう

ワンダースクエアでは
イベントが開催される

小川は池になり、その水はワンダースクエアの下を通って（イメージ）中自然の森に「布滝」となって注がれる

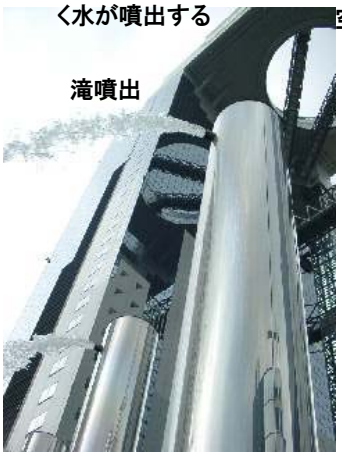
クリスマス祭典

4－4；都心に、垂直宇宙軸のランドスケープをつくれ

超高層建築に垂直宇宙軸のランドスケープデザインをする意味とは何でしょうか。それは都心に林立する超高層建築群によって、空が奪われつつあるという都心の景観の問題に起因しています。大地から上に伸びる建築群は、より巨大でより高い構築物やモニュメントを創ることによって自然をわがものにし、支配したい欲望の文明の表象です。神の摂理に抗うバベルの塔になりかねません。超高層建築群の谷間にいる人間は、バベルの塔に打ちひしがれます。この欲望の見上げる風景を自然の摂理に調和させるのは、どうすればよいか。ランドスケープデザインでなすべきことがあるのかという問いかけをしたときに、ひらめいたのが「那智の滝」でした。那智の滝は、聖なる山を背景にして、我々の地上世界に流れ落ちます。聖なる瀧で、地上が清められます。わたしは、那智の滝を、超高層建築を背景にし、或いは借景にして、滝を天空から流すことを考えたのです。いままでにない人工の那智の滝です。滝を空中庭園から流すことはできない。そこで、空中庭園のほぼ垂直の下の地表から見上げる位置に、滝の噴出口が重なるようにしました。

中自然の森の樹林を通して、
空中庭園から落ちる列柱滝が
噴出する風景を見上げる

水の誕生
空中庭園を背景に、勢いよ
く水が噴出する



9本の列柱滝から噴出する滝の水は、中自然の9つの岩にそれぞれ降り注ぐことで、地上の命の水になる

空中庭園から噴出した水は、地表の岩を清め、中自然の森の生命を潤す。
この風景を、背後のレストランから眺める。

那智の滝
を、地球の
庭の滝に

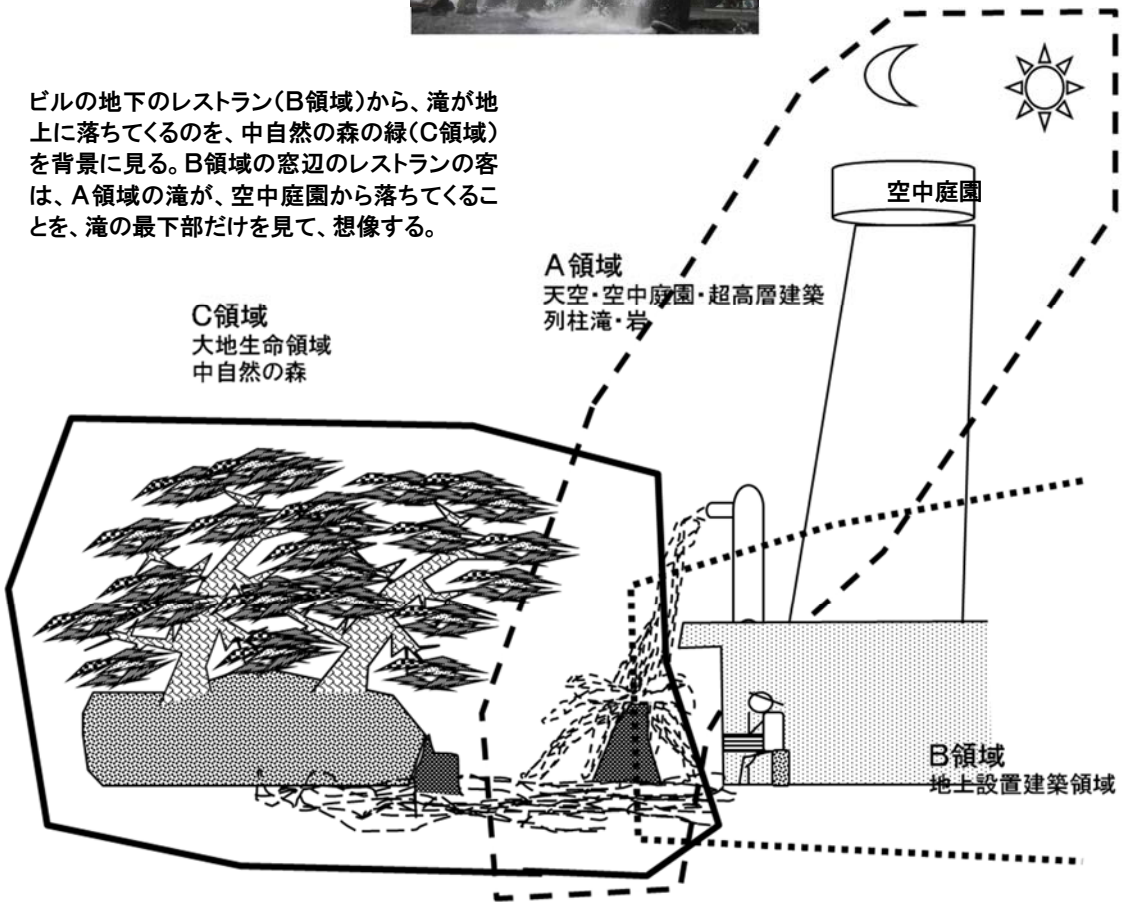
4－5；滝を内側から見るランドスケープ

○都市の中で、滝と一体化

日本庭園の中には山を築き滝を落とし流れのある構成は多く見られます。それは滝を正面から見る位置にあります。滝をより一体的にとらえようとする人は修験道で滝に直接身体を打たせます。日常生活の中で滝の風景を最も身近なモノにするにはどうしたらよいか。この問いかけに、私は滝の裏に回り、滝の内側から滝が岩を打つ姿を見ることで達成されると考えたのです。滝を内側から見る。これで、都市の中で滝の気分になれ、滝との一体化を味わえることができます。

上；直径80mの円弧の形をした中自然の森は、中央に森を抱えまわりを水面で取り囲んでいる。中自然の森を囲んでレストラン群が設けられ、窓辺の席から、9つの岩が見える
左；9本の列柱滝を中自然の森から見る。この後ろにレストランがある

ビルの地下のレストラン（B領域）から、滝が地上に落ちてくるのを、中自然の森の緑（C領域）を背景に見る。B領域の窓辺のレストランの客は、A領域の滝が、空中庭園から落ちてくることを、滝の最下部だけを見て、想像する。



〇大都会の中の、非日常の気分

まるで、巨大な崖の表面を落下する幾条もの滝を、崖の下でえぐられた洞窟のなかから、滝壷の風景を見ているような光景が実現できました。
崖に相当するのが超高層建築で、その洞窟が、地下一階のレストランの窓辺です。非日常の世界、リゾート気分を、大都会の都心で味わえるのです。

空中庭園を背景にして噴出した滝が、中自然の森の岩に降りそそぎ、地上に命を届ける。中自然の森の生命が蘇る風景を、建物の中から見ている。

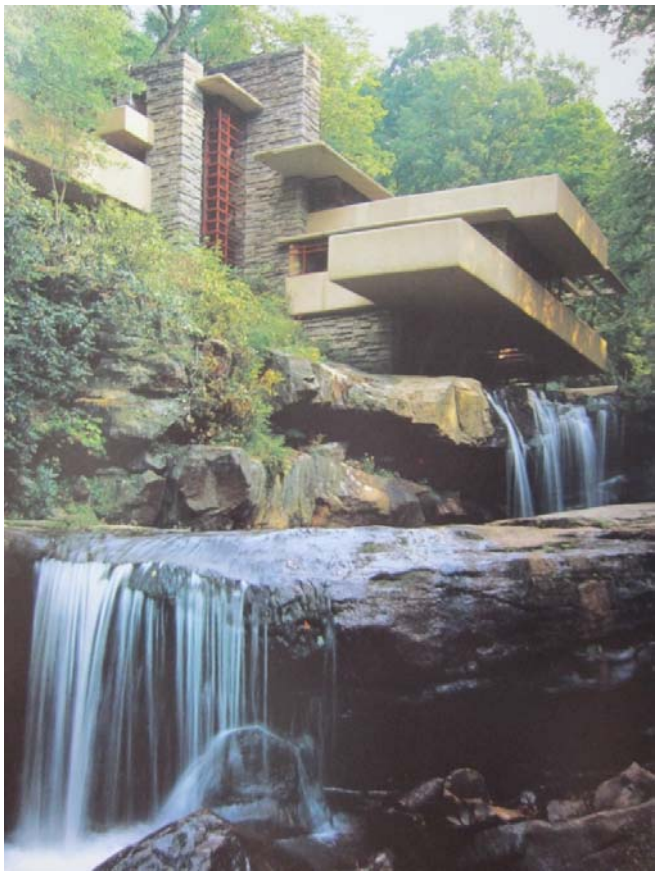
中自然の森に面したレストランから、列柱滝に打たれ、水が迸る水と岩がおりなす躍動の姿をまじかでみることができる。

天空からの水が、地上に降り注ぐ瞬間の風景

○滝を、どこから見るか。

那智の滝はご神体です。拝む対象として正面から滝をみます。滝をもっと身近に、自己のものにしたい。それが、滝を裏から見る風景づくりでした。滝を生活の中の風景として取り込む素晴らしい作品が世界に二つあります。一つはアメリカの落水荘、もう一つは日本の清水寺の音羽の滝です。落水荘のユニークさは、住居の下から滝が流れ落ちていることです。住居からは滝が見えないが、滝と共に生活しているという実感が体得できるのです。

音羽の滝では、参拝者は滝の源流である山と滝祠を背にして滝の清らかな水を飲みます。滝の正面から見れば、滝の裏側で参拝客が、山を背にして水を飲んでいる風景になります。滝はその位置によって、様々な風景を創るのです。

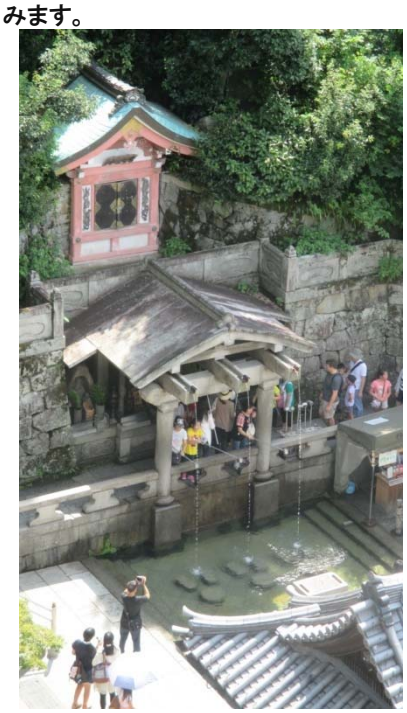


清水寺の音羽の滝の場合

東山36峰に連なる音羽山から流れ下ってきた地下水が3本の筧（かけい）を伝って滝壺に落ちています。三本の水の一つだけを選んで一口だけ飲むのが流儀。二口飲むと半分のご利益。三口も飲むと三分の一のご利益しかいただけないといわれています。滝の背後の滝祠には不動明王や行叡居士がお祀りされています。 祠に向かって手を合わせてから清らかな水を一口飲みます。

フランク・ロイド・ライトの落水荘の場合

カウフマン（施主）は、近くの別荘で夏をすごすとき、家族が滝の下の浅瀬で泳ぎ、滝の景色を楽しんでいたから、最初から滝を見ながら住みたいと願っていた。だから、ライト（設計者）は別荘を滝に対面して、滝を見ることができる建築にすると考えていた。タリアセンで初めて図面をライトに見せられたカウフマンは、驚いた。「私はその家が滝の見える所に置かれるとおもっていたのに、何と滝の上とは・・・」ライトは静かに次のように答えた。「私はあなたに、滝と一緒に住んで欲しいと思ったのだ。ただ見るだけではなく、あなたの生活の一部に成るようにしたい」と。（出展;「滝と人間の歴史））



4－6;森を核とした都市
中自然の森＝地球の庭
○中自然の森＝地球の庭が、都市の真ん中にある

２０世紀の初めにイギリスのロンドンの郊外にハワードによって田園都市が誕生しました。それまでのヨーロッパの都市は城壁に囲まれて教会や王の宮殿が中心に都市が創られていたのですが、田園都市は緑の公園が都市の中心でした。都市は自然と調和して発展するという理念が、公園を中核とする城壁のない理想の都市を創ったのです。中自然の森は、新梅田シテイの建築群の中核にあります。直径８０ｍの円弧の中に周りを水面で取り囲まれた森で、「水と緑の惑星」を表象し、地球のイメージです。地球の庭は、空中庭園の真下のワンダースクエア＝広場と、その北に接する花野里山と連続して、新梅田シテイの中央空地軸となり、新梅田シテイの都市の骨格となっています。

中自然の森
＝地球の庭
森の中に一歩踏み入れると、そこは樹海の中に包まれる。時折、17mの落差の滝のしぶきが森に降り注ぐ。暑い日射しが照り返すビルの谷間の間の森は、それ自身が都市砂漠のオアシスです。
水鳥が訪れ、野鳥や昆虫が飛来します。

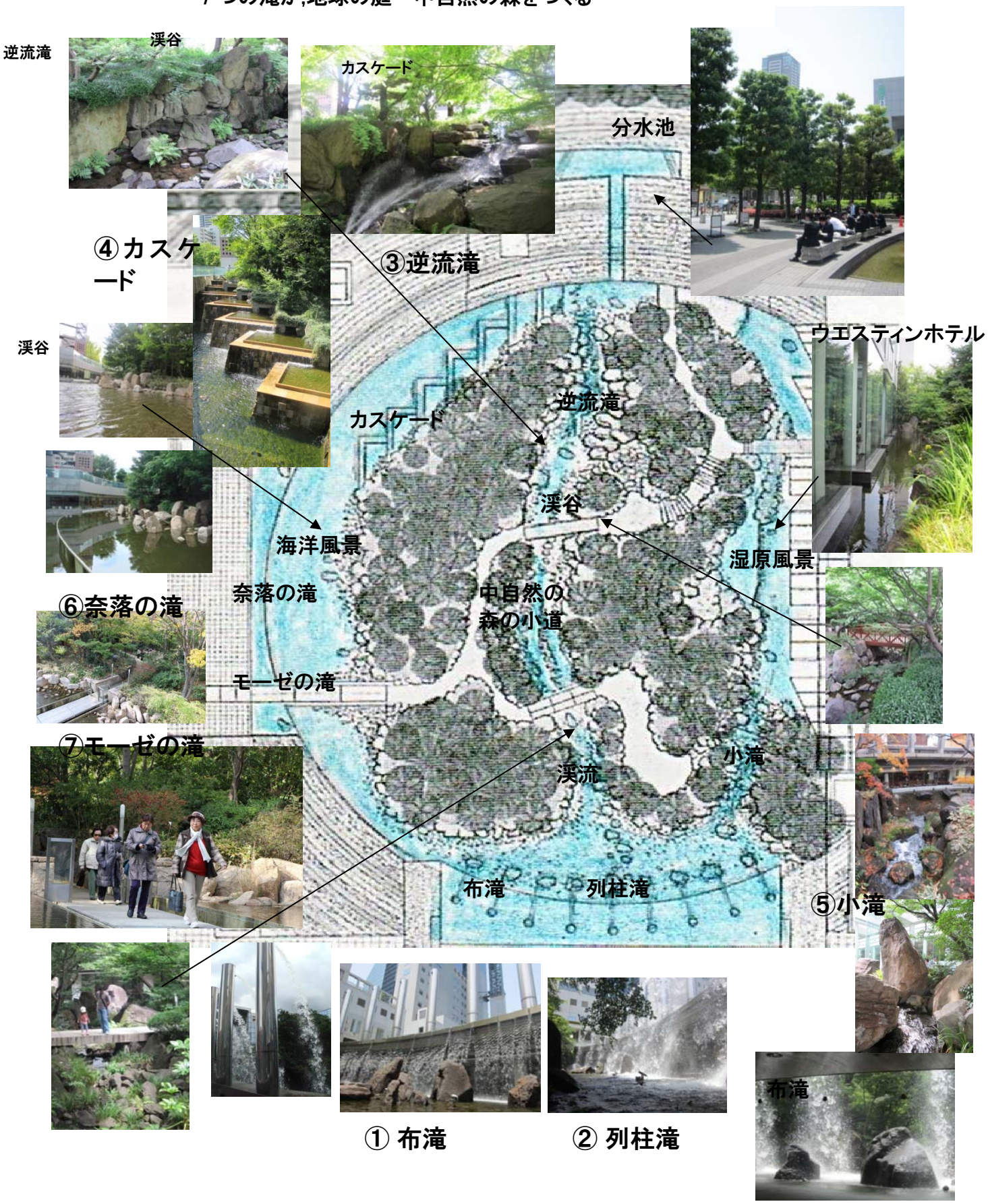
4－7;7つの滝が創る「水と緑の惑星」＝「地球の庭」

○楽園の滝

ブライアン・ハドソンは「滝と人間の歴史」で次のように述べています。「世界中のどの文化でも、死後の恵みに満ちた世界、すなわち「天国」としてイメージされるのは庭園で、そこは川が流れ、滝や水の生命力を与えられた緑豊かな風景が広がる。滝やカスケード、泉は、地上の人工的な楽園に不可欠な要素として重要な役割を果たしている」更に続けて「聖書に登場する「エデンの園」には四つの流れに分かれた川があり、アダムとイブがその罪のために追放されたときに「失楽園」となる。コーランでは、「庭」は通常、楽園を意味するために使われる言葉。信者の来世はしばしば川が流れる庭園で楽しんでいる姿で描かれる。ミルトンの失楽園など、想像上のエデンの園や、地上の楽園を再現しようと人工的に設計された風景には、滝と泉が本当によく見られる。緑が生い茂る山山、洞窟、急流、流れ落ちる滝のある風景。、、、ミルトンの時代は、山は自然の中の奇形部分であり、世界は平らでなめらかな土地として創造されたと広く信じられていたが、人びとは理想郷や至福の地を庭園のなかで表現した。風景の好みが変わったのである。」

中自然の森は、エコロジーの森であり、そして「地球の庭」として、建築に取り囲まれた都市の中核の空地として生育しています。だから、その庭は「楽園」を表象するもので、その具体的デザインでは、「水と緑の惑星」として、渓流、渓谷、様々な姿態の動き、逆巻き、逆流する滝、そして海洋、湿地がなければならないのです。「地球の庭」のデザインに、７つの滝を取り入れたのはそのためです。

7つの滝が,地球の庭＝中自然の森をつくる



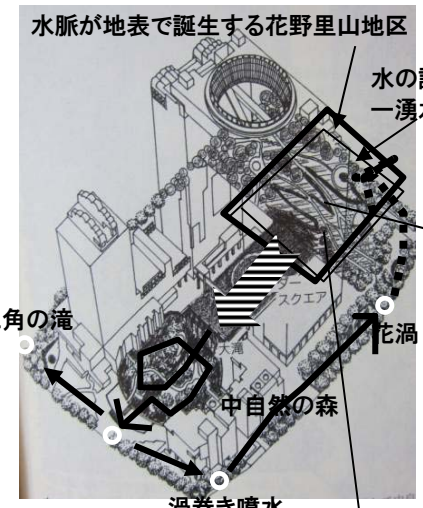
4－8;水が巡る都市の風景

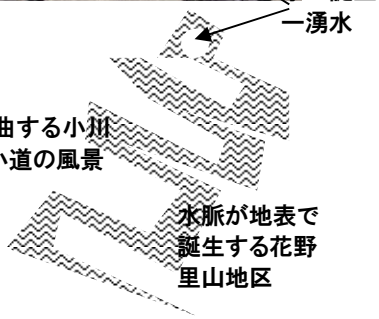
○街に人々を楽園としてとどめおく風景デザイン手法

街を歩くと細やかでリズミカルな流れがあちこちに見られます。都市砂漠の環境で、街を巡る涼しげな水脈が、緑を呼び戻し人々に活力を与えます。街が人々の居住する実際の楽園の風情をもつために、幻想の楽園に欠かせない水脈の風景を、公開空地に取り入れました。イスラム庭園は、日陰と水のある庭園が楽園の象徴となっています。楽園には四つの河があり、一本は水、一本は乳、一本はぶどう酒、そしてもう一つは蜂蜜の河とされています。四本の水路で分割された＜四分庭園。の起源は楽園にあるのです。

スペインのアルハンブラ宮殿の離宮フェネラリーフェでは、細やかで涼しげな水脈が庭園を駆け巡ります。「望楼へと導くのは、有名な水の階段である。この階段の両側にはタイル仕上げの手すりの上を水が流れ、各斜辺の上下では噴水のある水盤となる。階段は中央に噴泉を備えた踊り場で分節されている。この涼しげな水の階段を上ってスルタン妃の望楼の園亭に着くと、城壁とその向こうの平野を見返す素晴らしい眺望が開けるのである」

水脈は風景を創り、風景へと導きます。生まれた水は、外に向かって遠心的な動きをし、街の四方へと広がり、拡張と収斂とを繰り返して、街中を循環しています。水が巡る水脈の風景づくりは、人々を街、都市を楽園としてとどめ置く最高のデザイン手法です。





さまざまな水の風景を創る水脈をめぐる街

下;水の誕生一湧水から流れ出て、階段状の滝に導かれて、花野里山を潤す小川になる

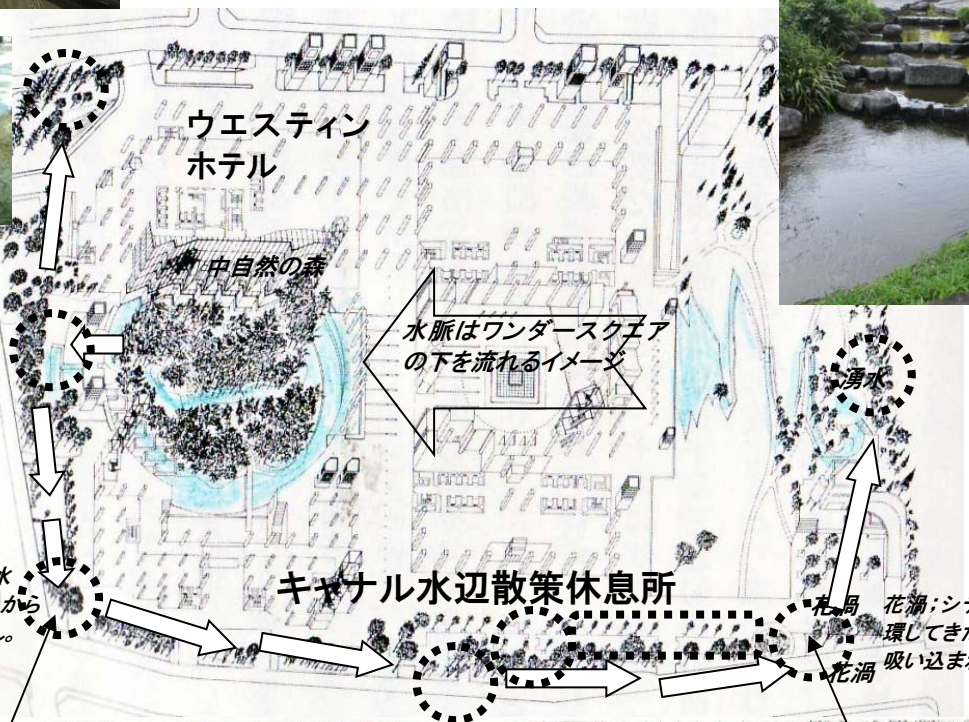
左;花野里山を巡る小川の水脈は、扇状地で、大きく蛇行を繰り返し、乾いた都市砂漠を潤す。

水が巡る水脈都市

三角滝

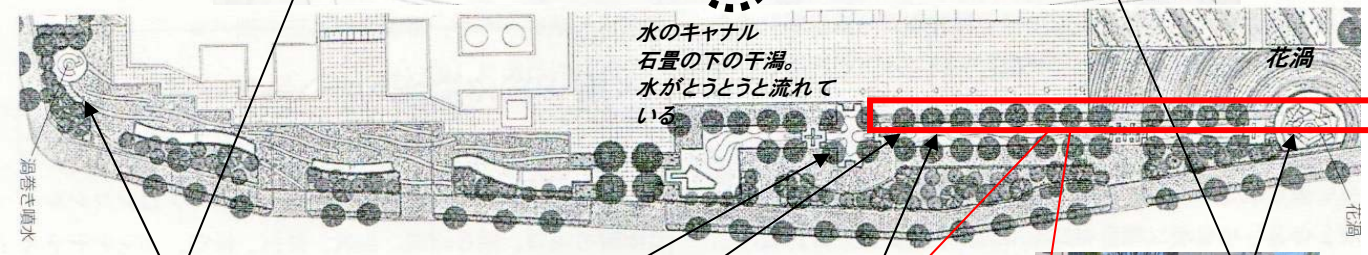
湧水

分水池周辺

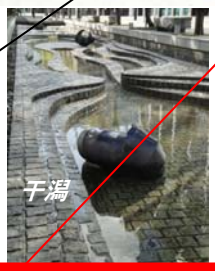


渦巻き噴水
水の地中から
の噴き出し。

花渦；シティを循
環してきた水が、
吸い込まれる



渦巻き噴水



上；花渦
下；空中庭園からの花渦

上；緑化壁設置前。キャナル水辺の散策休息所のベンチ、街路樹があった。

上；ベンチ・街路樹・緑地帯を撤去して安藤忠雄氏提案設計の緑化壁が設けられた

上；緑化壁が、花渦にのしかかる。水を巡る道を寸断

安藤忠雄氏提案設計の緑化壁が公共空地を破壊した

5)文明的自然の領域

5－1;梅棹忠夫氏

○京大探検部の顧問・梅棹忠夫先生との出会い

１９７１年の万博記念公園自然文化園の基本設計と実施設計を担当することになりましたが、１９７０年に開催された大阪万博会場の跡地利用懇談会（会長は東京大学の高山英華教授）の委員の一人であったことを当時は知りませんでした。私が設計でどのような風景デザインをすればよいか悩んでいたころ、フット気がついて、私の大学時代の京都大学の探検部の顧問をされていた梅棹忠夫先生を思いだし、跡地懇談会でどのようなことを話され、跡地にどういった思いを抱かれていたのかを知りたいと思いました。特に、私が造園界に出る前に初めての作品を創ったのが梅棹邸の庭園であったから、庭園に関心を持たれている先生は、さぞかし「自然再建」をテーマにした万博記念公園の設計では自然保護や庭園文化について独特の意見をお持ちだとおもっていましたから、おおいに参考にさせていただこうと梅棹邸に出かけました。大学を出てから数年をたっていましたが、梅棹邸の庭に再会するのは久しぶりでした。庭の設計については後で述べますが、私が万博公園の基本設計の図面を広げ得々として自然再建の意図を持つ意味を説明した後に、梅棹先生が開口一番に言われたのが、今でもショックであったことを思いだします。

「君は、万博跡地に森を創り、自然を回復するというが、樹木を植栽し、森を創る最大の目的を何だと理解しているのか。それは、万博跡地に、建築物を建てさせないためだよ。樹木が茂っていれば、少なくとも建築を建てようとする目論見が薄れる」という趣旨のことを言われたのです。私は眼が覚める思いでした。

○都市に森を創るのは、建物を建てさせないためだ

私は現在、造園空間は、都市の密集・集住地の中に空地を生み出すという論理を展開していますが、梅棹先生は、まさしく万博跡地の１００㌶にも及ぶ地価の高い貴重な土地を、都市開発をこれ以上させないために、森林を創ることを主張したのです。森の再生は、私が設計でめざした自然再建、生態系の復元より以前に、建物を建てない「空地」を生み出すことにまず第一義的な意味があること。この空地があればこそ、そこに自然が蘇る余地が生まれ、人々が太陽の光をあびて楽しむレクリエーション空間が生まれる。建物を建てないという選択は、都市を「文明の進歩」と見るに見方に対して、「文明の進化」として捉える視点だと考えます。空地を創りだすことによって、都市は持続可能な発展を遂げる指標が生まれるからです。「都市に森を創るのは、建物を建てさせない場所をつくること」と言う梅棹先生の論理は、私に都市を、新しい視点から見る目を植え付けたのです。これが梅棹文明学の合理性からくる論理です。

梅棹文明合理主義は、梅棹先生が私に人生最初の庭園設計の機会をいただくとともに、充分に私を刺激しました。

○中庭という「空地」をつくる梅棹合理主義

梅棹邸では当時（１９６５年ごろ）月一回第３金曜日の夕方から、通称「梅棹サロン」がありました。梅棹先生は文明評論家として多くの人脈を持たれ、また学科を越えて多くの学生や社会人の「弟子」がいました。そうした人々が、梅棹邸に三々五々集まって議論を交わしたのでした。わたしもその一員に入れていただいてしげしげサロンに通いました。そういった縁から、私が学者の道ではなく、造園家の道を選んだことを知って、私に梅棹邸の庭の設計を依頼したのです。

私が設計を依頼されたのは、梅棹邸のサロンが開かれていた応接間に隣接する庭でした。しかし、その庭は実際には一般的に言われる中庭ではなかったのです。隣家との境には庭を取り囲む塀があったが、その塀の内側、つまり梅棹邸の庭に向かって、梅棹先生は屋根を付け、塀に沿って屋根の下に廊下を三方にめぐらしていたのです。そして、塀の内側に本棚を設けたのです。二階の書斎の本が溢れかえって収納が追い付かなくなり、回廊付きの本棚を塀にそって設けることに思い当たったのです。こうして、「塀に取り囲まれた庭」は、回廊の向こうには部屋がない「擬似中庭」ができたのです。私がこの庭の設計を依頼され、梅棹邸を訪れたときに、擬似中庭から見た回廊の風景に驚きの念を隠せませんでした。擬似中庭にはガラス戸つきの縁側がぐるりと取り囲んでいたからでした。その縁側の向こうにあるのが書架でした。私は、縁側として書架を見ているから、三方の縁側の向こう側には部屋があると、とっさに錯覚してしまったのです。しかし、次の瞬間、なにか違和感があるのに気がつきました。なぜなら、月一回の梅棹サロンで伺った時や昼間に打ち合わせで訪問した時に、サロンの応接室から見た庭の風景では、庭の向こうには塀があり、その塀は隣家との境界を意味していたからです。そして、一瞬、梅棹先生は書庫などのために、隣家を買収して、その上で、回廊の向こうに部屋を増築したのかと信じてしまったからでした。

梅棹先生が塀に敷設した書架の回廊を思いついたのは、梅棹先生が過ごした幼少の頃の今日の町屋の西陣の家にあったかも知れません。町屋はウナギの寝床です。道に面してミセがあり、そこは商売の間。その「母屋」に面して「坪庭」と呼ばれる中庭があり、その奥に「離れ」があります。坪庭には光が入り、四季の移ろいが、本家と離れの部屋から、楽しむことができる。この記憶から、北白川の郊外に自宅を持っても、一戸建て庭付き住宅の郊外の典型的な住宅の庭に回廊を付けて、中庭を創るのは、それほど違和感のある発想ではなかったであろう。人類学者としての合理性からは、中庭の伝統を、郊外の住宅に持ち込むことは、郊外の過密性を伝統的な町屋の中庭を取り込むことで、新しい郊外住宅を創造したことになる。私は大いに感動したのでした。そこには、中庭という、「建築のない空間」であり、それが回廊によって、梅棹邸の中核の庭＝中庭すなわち、「空地」になったからです。

梅棹忠夫邸の庭　週刊朝日　1965年１月８日号
「梅棹忠夫;

　広さ約１０坪、ぐるりは書庫つき廊下にかこまれ、借景などはもとよりなく、植物は南天がたった一本しかない。手水鉢はじめ、石はすべて百数十年来の西陣の先祖の家から移したものばかりで、下地をコンクリートで固めたうえに、花崗岩をくだいた「白川砂」を敷きつめ、水はけは上々。工費は５万円。
京大林学部造園科出身の吉村元男氏との合作、手を下した老庭師に「こんな無茶な石の置き方ははじめてや」とぼやかれた。　もともと平仄（ひょうそく）にしたがった観賞用の庭ではなく、わたし自身が参加するための庭、つまり部屋の延長で、この円環状に並べた石のうえを歩きながら考えをまとめる場所なのである。しかし、つくってみて、庭作りに夢中になる人の気持ちがよくわかった。（評論家・京都市左京区北白川）

５－２;作家高村薫氏と吉村元男の対談（対談内容を高村氏が記述）

○都市の緑化を阻む大阪人の〝不経済観〟 2014.5.6 産経新聞

「関西に住む人なら一度は行ったことがあるだろう、あの万博記念公園（大阪府吹田市）の壮大な森を創った造園家である。高度経済成長時代の真っただ中、当時の万博記念協会が会場跡地１００ヘクタールを３０年で自然の森に返すという英断を下したのは、まさに奇跡だった。吉村氏はそう述懐する。
　けれども万博公園の奇跡はそれに留まらない。何より、その大事業が弱冠三十余歳の新進造園家に任されたこと。当時の公園の常識ではタブーだった柵のない水辺や、治安の面で問題になりかねない密生林の配置などの意欲的な設計が、幸運にも所管が大蔵省（当時）だったことで、ほぼすべて認められたこと。そして２５５種、６０万本の樹木が植えられた公園は驚異的なスピードで生物多様性を回復させ、いまやほぼ自立した森になっているのだ。

公害と自然破壊が当たり前だった時代、緑や水を扱う造園家はなにかと時代に抗うことを余儀なくされ、自ずと文明論的な視野に行き着くこともあったのではないかと思うが、氏の場合もそのようだ。都市と自然は対立するものなのか、共存しうるものなのか。一方で環境を破壊し、他方で自然再生を叫ぶ現代社会の矛盾を克服する視座はどこにあるのか、などなど。

あるときは新梅田シティ（大阪市北区）の庭園や水辺を設計し、あるときは生駒山系の森林保全に奔走しながら、氏の頭には私たちの都市生活に《野生》を導入する発想が駆けめぐる。曰く、自然生態系と都市のバランスを考えるのではなく、私たち都市生活者の視点から自然の再構築を考えることー言うなれば、ときどきの人間のニーズや価値観に合わせて、川をコンクリート護岸にするか、自然護岸にするかを決めるというのだ。都市か自然かの単純な二者択一ではない、この相対的な発想こそ造園家吉村の真骨頂だと思う。

都市への《野生》の導入は、人間の側がこのように主体的に自然をシステム化、装置化することを意味するのだが、そうして装置化された自然を氏は「中自然」と呼ぶ。そこでは樹木を刈り込んだりしない。都市にあっても可能な限り自然に成長させることで、都市に《野生》の尺度と時間が生まれるというわけだ。

もっとも、都市デザイナーでもある氏の発想は《野生》からさらに都市の神話性へと進化する。都市には運河や噴水や親水公園など多くの水の風景があるが、なかでも氏があえて「ありえないところにある水」と呼ぶ水がキーワードになる。すなわち必要性や合理性と切り離された水ーたとえばインド・タージマハル廟の前庭のように象徴性や永続性を表す水の風景を通して、氏は文明の核としての都市を構想するのである。

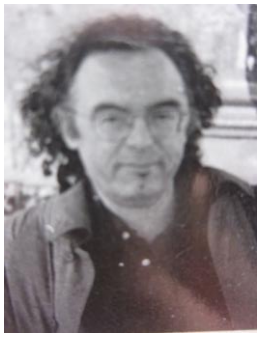
とはいえ現実はどうだ。日本の都市はいまなお自然を無頓着に破壊し続け、核となる象徴性を自ら葬り去りながらひたすら膨張し続けている。ちなみに大阪は市内に緑が少ないことで有名だが、なぜこんなに緑化の意識が低いのかと問うてみると、氏からは明快な答えが返ってきた。曰く、たとえば１本の樹木を都市に植えたとき、その木自体の価格はせいぜい数万円だが、それが成長して枝を張った際に占有する土地の値段は数百万円、数千万円にもなるので、地価の高い都市に木を植えるのは実に高くつく話なのだ、と。

なるほど、都市に森をつくるのが経済原理との闘いなら、大阪人は樹木に土地を占領させるのを頭から不経済とみなしているのかもしれない。現に、ＪＲ大阪駅周辺に残された梅田北ヤード１８ヘクタールの再開発計画では、すでに商業施設もオフィスも完全に飽和状態のところへ、さらに高層ビルを建てるらしいが、人口減少時代にこれほど経済的に合わない話もない。

それならむしろ、梅田北ヤードをニューヨークのセントラルパークのようにすればはるかに多くの人が集まり、お金が動くのではないか。都市の森こそ都市の価値を高めるのではないか。氏はいま、有志とともに北ヤードを６５０億円で買い取る運動を起こそうとしているが、この行動力の源は文明への夢だろうか、危機感だろうか。

5－3；オギュスタン・ベルク氏（「地球存在の哲学」ちくま書房）より引用（写真も）
〇囲われた聖なるエコロジーの庭
地球を内部化した大都市の新しいエクメネー（風土）

「こうして原題のエコロジー運動のおかげで、新種の「庭園」が陽の目をみることになった。人間の創造性はそこにひとつの「自然」を表現するが、その自然の源泉は近代科学（この場合は生態学）にあり、もはや神話のなかにはない。たとえばモントリオールのバイオ・ドーム。そこには四つのタイプの生態系が創り出された（セント＝ローレンス運河の河口、セント＝ローレンスの森、南極の海岸）。**またたとえば吉村元男が大阪の新梅田シティに、「中自然」（自然のプロセスと人間の行動が結びつく場所）というコンセプトに基づいて作った庭もある。**これらの庭では、自然がはっきりエコロジーに由来する指向対象として介入している。この事実がそこにある種の聖性をもたらしている。たしかに古代都市の城壁の内部に、聖なるコスモロジーが表現されていたのと同様に、これらの庭は、十分に保護された囲い地の内部に、自然が脅かされるようになってから私たちの社会が自然に与えるようになったすべての価値を表現している。このような自然を聖化しようとする傾向は、宇宙に対する人間の意識の単子論的関係を構造物で表現するという欲求さえも越えて、聖なる空間を保護する囲い地という古代ギリシャの temenos の原則を再発見するようになっている」



「とりわけ境界というもの（家の敷居、都市の城壁、寺院の柱廊、絵の額縁等）は聖性を帯びやすい。有限から無限への関係を設け、そうして地球の限定された場所に世界の広大さ（さらには絶対者の卓越）を現存させるからである。ギリシャ語やラテン語で、tem-という語根（「切る」の意。そこから切断としての境界の観念が生じる）が temerios（囲まれた聖所）や templum（寺院）と関係を持っていることが表現されているのはまさにこれである。」

「まさしくこのささやかな場所は、自然全体を反映した単子である。けれどもこれは生物圏と生息場所の直接の対応におけるものではない。その関係は生態的であるばかりではなく、風土的エクメネーなのである。まず生物圏が人間存在の意識のなかに反映していなければ、そしてそのことを通じて生物圏が人間存在の意識のなかに反映していなければ、その聖性を帯びた何かになっていなければ、そのような関係は無に帰してしまう（当の生息場所が存在しなくなってしまう）からである。

このような関係が、今日多くのエコロジストを動機づけ、たとえばよく知られた「地球規模で（すなわち地球の尺度で）考え、局地的に行動する」という公式で表わされている。」

編集後記

荒木芳邦先生を偲ぶ座談会と吉村元男先生ご講演のテープを聞きながら思ったことは、設計の思想、哲学、信条、そして並々ならぬ情熱、信念を見たことだ。久しぶりに魂が揺さぶられたと言ったら過言だろうか、お話の間、しばし気が高揚して不覚にも涙した。だから、心打つお庭・公園が出来たのだろう。

荒木先生の薫陶を受けた高弟の語るお言葉の一言、一言が実に重い。荒木先生の良いものをおつくりになるお考えは聞きしに勝るものがあり、それを具現化される諸先輩の御苦労は計り知れないものであっと拝察する。それは今も変わらない荒木先生に対する尊敬の念と、お慕い申し上げる敬愛の心があったからこそ成し得たことであり、その眼差しは崇高普遍であると受け止めた。このような気持ちが、次代の造園界を担う方々に伝わればと願うところである。

吉村先生の万博公園に対する自然再生の取り組みは高山英華・梅棹忠夫先生の理念を受け継ぎ、生態学と都市林の考えを先取りされた誠に意義深いものであった。今日指摘される生物多様性はもとより、レクリエーション、景観、防災までにも踏み込んだ「自立した森」の創造は、それは人類永遠の財産で大阪府民に親しまれる理由がよくわかった。

新梅田シティでは敷地のど真ん中に森をつくり、建築を担ぎ上げるという荒技で、造園の市民権を確保された辣腕の造園家はもう出ない。語る口調は哲学者の如くカリスマ性を帯び、その重厚感は見習わなければならない。

両先生に共通するところは、繰り返すがほとばしる情熱と不屈の信念であると受け止めた。会場を見渡すと関西の重鎮がずらりと揃い、皆さん真剣に、食い入るようにステージを見つめられていた。こんな光景は二度とないだろう。造園の奥深さと熱き魂の大切さ、そして造園家としてのあるべき姿を教えていただき、帰路に一抹の清々しさを感じた。

最後に本誌をまとめるに当たり、上甫木昭春現支部長、宮前保子元支部長、若生謙二前支部長のご指導に感謝申し上げ、記録再生に労力を惜しまず協力してくれた甲本志織・西浦拓也・宮地歩君(鳥取環境大学)に謝意を表します。

平成 27 年 1 月 20 日

（仮称）設立 50 周年記念事業実行委員会

統括　上甫木昭春(大阪府立大学)

運営　宮前保子(日本造園学会)

企画　若生謙二(大阪芸術大学)

中田政廣(ナカタ空間企画)

橘俊光(明石海峡公園管理センター)

中西広樹(ヘッズ)

田中康(ヘッズ)

今西純一(京都大学)

編集　中橋文夫(鳥取環境大学)